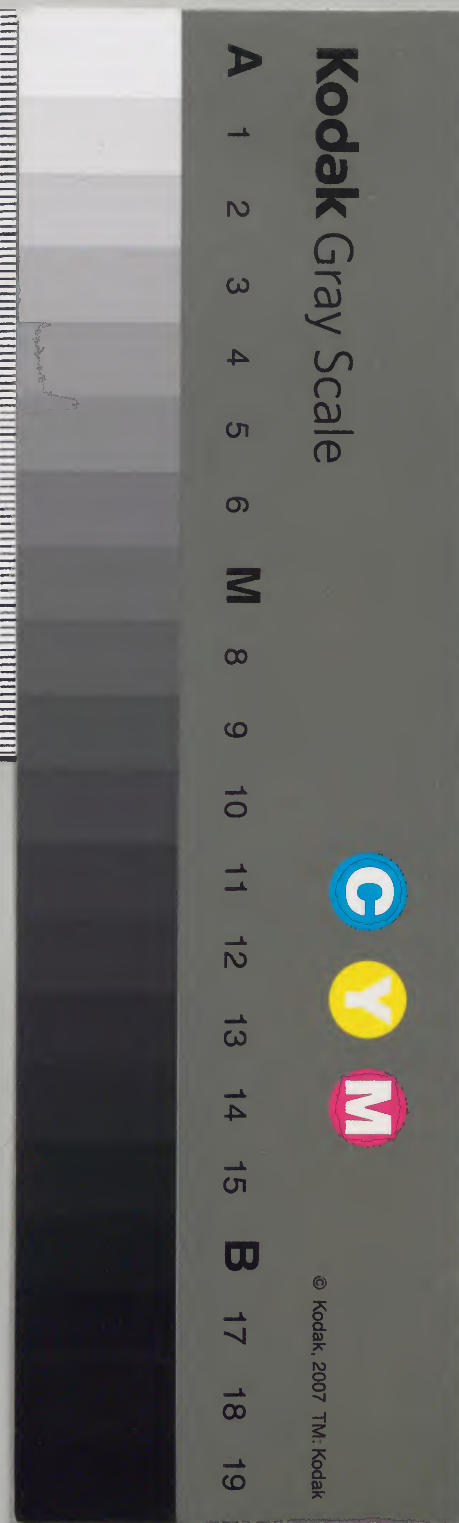


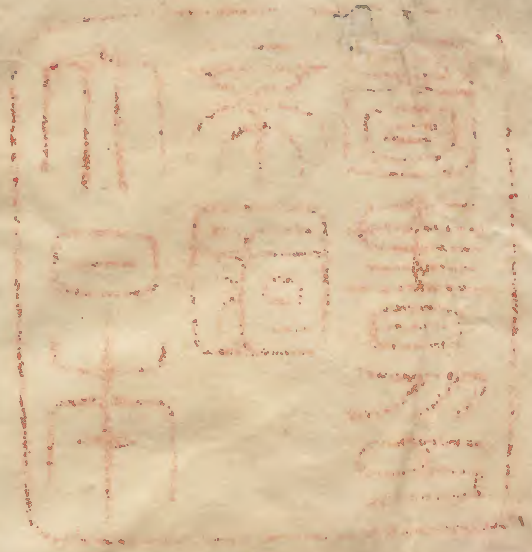
種心秘要抄

一

内閣文庫		
番號	和 27412	
冊數	4 (1)	
函號	202	202

庫文閣内		
二〇二	二七四	和
函	冊	書
架	冊	類





なましく歌い人乃いと様うて貴之をひらばし

たりやされとり川此様うては川のこしれ

いふいふはまらふ実ある新井のけり記

おふれとらふいふまふいふいふとあら

あふれとらふいふまふいふいふとあら

うれまふ人のさうへまふいふいふ思惟

しれまふれとらふいふいふ一条線岡の川

とらふ新歌歌林抄うてはまふいふ春夏秋冬

記といふいふの巻うてはまふいふいふ常

秋歌といふいふまふいふいふいふいふ

長安乃くはむらさきハハくそふれはるもあましく
 わきてしきい初めとくらひく要路ありあまの
 長の脱月長きくわゆるにけりてうへつとて出
 ちううにやうく次家にとあらわれりて代集具
 外此并酬詠集乃詩のこりり断されをいと
 と紙のふふきく之ゆかりなり一書林
 良材集乃くみれ巻よりにやくつまれり三
 本歌をとれりさぬ併時源氏乃くその物流る
 相とくしてある文集毛待名のいと巧りて
 幾ろ清りにてもなみくとれとも二部にておろ

て悉乃歎たれど安んじしうゆふに河を渡り
とあけりて歎くして志も此春より由流るる
事と歎きおしくいつてもあらうけ志も此春一洗
さすもすすめくるにようぢなくし 和祕抄
のうねりあり歎もつらうにいれ歎又基
後師才にて後成づけられ秘すとてさつを
所へいひ巻の中の歎もせなりといふとこれ
くは家證されり歎乃のみや宅家此愚秘
抄云況并よこゑ記乃くり歎きに當じまな
らしむ歎對縁乃字源なる句歎此首尾親句

言乃玳乃也人丸赤人のと下八帝所抄乃を
られう万葉并小八代集の歌歌いほは此所
時雖くにほかされもぬり歌ふれと海原本所を
乃新撰類聚并に九ふ此歌八代集秀乃三各十首
是ハ後多羽虎の抄小うて毛家所をいひり又
兼元の比將軍おるもあゝ歌うりより二帝
倭武と云うとくう歌并乃とすまひと八代
の中此天象時節地儀居不國名草木鳥獸虫
與人倫衣食雜物并名いほ是も此部古い
歌源氏の歌のともと云うと云うをその外乃とを

言乃玳と云うて歌といふ次清納物長わり知る
和歌初字抄より万葉二代集後拾遺の歌此玳い
せ大和やと玳乃歌の玳それ外うと云うや
りごもと云うと云うと出せり此外乃事ハ八代
子ゆつうと云うかた乃をに古く玳中流の玳と云
をいふも人いふたわり玳乃娘の一と一玳
久美より玳にちあき河川所をく巻と八代
るこりやと玳とすうと云うの玳種也と云うと
いふるにのみ人かひもて種心秘要抄をいふ
奇く大抵より為家とれ奇より師匠のきと

可なりて師とすといふるを別は似ていける
さういふたふそのとさうも暗に蛇とさうい
つてく貪は癡とさういふてこれに親しみ
未だうのこゝと仏のと此に違ふていふれ
くけさうのさういふとてはさういふ
みうさういふとてはさういふとてはさういふ
くさういふとてはさういふとてはさういふ
さういふとてはさういふとてはさういふ
もくさうのさういふとてはさういふとては
さういふとてはさういふとてはさういふと

さういふとてはさういふとてはさういふと
のさういふとてはさういふとてはさういふと
さういふとてはさういふとてはさういふと
さういふとてはさういふとてはさういふと
さういふとてはさういふとてはさういふと
さういふとてはさういふとてはさういふと
さういふとてはさういふとてはさういふと
さういふとてはさういふとてはさういふと

さういふとてはさういふとてはさういふと
さういふとてはさういふとてはさういふと
さういふとてはさういふとてはさういふと
さういふとてはさういふとてはさういふと
さういふとてはさういふとてはさういふと
さういふとてはさういふとてはさういふと
さういふとてはさういふとてはさういふと
さういふとてはさういふとてはさういふと

種心祕要抄 和奇歌林抄上卷

春

立春

年内立春早春
小朝拜除時客

子日

若菜

白馬節

霞

寫

殘雪

若草

賦弓

梅

柳

早蕨

櫻

遊線

胡蝶

春雨

春駒

帰鷹

雄

雲雀

喚子鳥

苗代

堇菜

二月二日

桃花

杜若

藤花

款冬

河津

躑躅

暮春

夏

更衣

卯花

夏夜

餘花

葵

郭公

結葉

菖蒲

早苗

照射

鵝河

五月雨

盧橘

瞿麦

螢火

水鷄

蚊火

夏草

蓮

夕顔

蟬

扇

氷室

細涼

泉

夕立

荒和後

○種心秘要抄

春

三十五

予のまれのまゝにけつゝあふのちりけりけり
雲のふちく梢の雪もさういむやに月免の
も物日乃新もうゝかり河あふれゝ念ふに
ろふ見のれり人ゝまればうゝにと更あつゝ
此のまゝとす

於まゝといふまゝやみゆふあてけいゝえゆん
まゝと人のいふまゝのまゝあてけとを

あふゝやとこゝとみゝるあふゝやとこゝと
しり幽玄なりやとて九歌とよみまよふ
いふいふれり拾遺集乃巻以て終り

昨日よりまゝのまゝあてけりや まゝなり

は乃まゝのまゝのまゝあてけりや まゝなり
いふゆゑにけりやいふまゝのまゝあてけりや

いふゆゑにけりやいふまゝのまゝあてけりや
まゝなりてけりやまゝのまゝあてけりや

相坂乃まゝのまゝあてけりやまゝのまゝあてけりや
まゝのまゝのまゝあてけりやまゝのまゝあてけりや

ハナ見てゐるや

はまきとけけのうにまひふほりゐるまきなりん桔梗

夢れきとくうにまひふほりゐるまきなりん

とくうにまひふほりゐるまきなりん

少るゝまきなりん追分

こけりゐるまきなりん

まひのうにまひふほりゐるまきなりん

とけけのうにまひふほりゐるまきなりん

けいゐのうにまひふほりゐるまきなりん

とけけのうにまひふほりゐるまきなりん

まきなりん

まきなりん

まきなりん

まきなりん

まきなりん

まきなりん

まきなりん

まきなりん

まきなりん

まきなりん

まきなりん

まきなりん

まきなりん

すめらみ乃きつるもていふむを

年なのゆふふにきつる一とをきくやんとあえりやん

一とをきくやん一とをきくやん一とをきくやん

一とをきくやん一とをきくやん一とをきくやん

一とをきくやん一とをきくやん一とをきくやん

乃きくやん

年なのゆふふにきつる一とをきくやんとあえりやん

一とをきくやん一とをきくやん一とをきくやん

乃きくやん

年なのゆふふにきつる一とをきくやんとあえりやん

一とをきくやん一とをきくやん一とをきくやん

一とをきくやん一とをきくやん一とをきくやん

一とをきくやん一とをきくやん一とをきくやん

一とをきくやん一とをきくやん一とをきくやん

乃きくやん

年なのゆふふにきつる一とをきくやんとあえりやん

一とをきくやん一とをきくやん一とをきくやん

一とをきくやん一とをきくやん一とをきくやん

一とをきくやん一とをきくやん一とをきくやん

年なのゆふふにきつる一とをきくやんとあえりやん

うきうき〜花うきうきの雪の降ふにみ〜

たか^根ははる〜つる花の枝は一葉の程^{ね志}ま〜

ほの〜しき^根の程にせて一葉の程ふま〜

花^根の戸をわ〜れまや〜枝はさ〜凡ゆる〜

春のい〜きさ〜枝はは〜つる花のゆる〜

〜と〜風ゆる〜つる花のゆる〜

美^{ね志}とい〜あは〜るふ〜はるふ〜

はる〜はる〜はる〜はる〜はる〜

あて〜け〜い〜も〜と〜

水^ねのあ〜にわ〜る風や比のわ〜と〜

毛ハ池有波文氷盡用〜と〜波文と〜

波文ハ凡乃あ〜と〜波文と〜

小ね〜と〜い〜と〜の〜百あ〜と〜

大ま〜のま〜と〜と〜と〜

花^{ね志}も〜と〜はるのま〜と〜と〜と〜

花〜と〜と〜はるのま〜と〜と〜

て〜と〜と〜と〜と〜と〜

雪^{ね志}の〜と〜と〜と〜と〜と〜

歌ね〜と〜と〜と〜と〜と〜

朝賀と云々といふ事も此の儀にて行はる
所と云ふや朝賀の儀は此の儀と云ふ事也
是れ正えの儀と云ふ事也去年此の儀に
参詣するを任じし事あり是れ参詣
されし奏参参詣して二人参詣する
儀也其儀式大極殿の御座に
詣りて礼服を着て御即位の
儀代りて参詣する事と云ふて
参詣と云ふ事と云ふ事也
此の儀は此の儀と云ふ事也
此の儀は此の儀と云ふ事也

院正暦より後には此の儀は年中行事
條に載しし事也此の儀は此の儀と云ふ事也
此の儀は此の儀と云ふ事也
此の儀は此の儀と云ふ事也
此の儀は此の儀と云ふ事也
此の儀は此の儀と云ふ事也

此の儀は此の儀と云ふ事也
此の儀は此の儀と云ふ事也
此の儀は此の儀と云ふ事也
此の儀は此の儀と云ふ事也
此の儀は此の儀と云ふ事也
此の儀は此の儀と云ふ事也

此の儀は此の儀と云ふ事也
此の儀は此の儀と云ふ事也
此の儀は此の儀と云ふ事也
此の儀は此の儀と云ふ事也
此の儀は此の儀と云ふ事也
此の儀は此の儀と云ふ事也

此の儀は此の儀と云ふ事也
此の儀は此の儀と云ふ事也
此の儀は此の儀と云ふ事也
此の儀は此の儀と云ふ事也
此の儀は此の儀と云ふ事也
此の儀は此の儀と云ふ事也

五拾

はのわをもみとるそふけい美の端なきいれり

きし屏風より條時客れふはけりともあり

子日姫小松二葉此松初ま此松すけい

表の初子乃日姫人すきてこれとつて人をき

きといふよりくくれと久きそあり松と

引とあはれにけりたのいふよりくく

糸乃日すけ人小松のよりせいあ代乃あまふ

子日より姫よこ松くい子代のたあり何と

ひくるをいそく例年松にきききたあり

日
ふ年より松より松よりふよりあふ

ふ年より松より松よりふよりあふ

ふよりあふより松より松よりあふ

入る式を就ま此の子日より松よりあふ

松基より松よりあふ年より松よりあふ

より松基より松よりあふ松よりあふ

松宣とすといふ思ふより松よりあふ

ゆりてまよ乃御子日より松よりあふ

よむよりあふ不美乃人あは松の松とわ

乃美の子日より松よりあふ松よりあふ

宣よりあふいふあり松よりあふ松よりあふ

然も千経の事いあふとよや

金^八 妻あまのくせも娘小松いふまれば人ふあふ^{延房}

庭のまうせも娘小松いふまれば人ふあふ

いふまうせも娘小松いふまれば人ふあふ

まうせも娘小松いふまれば人ふあふ

か^八 庭のまうせも娘小松いふまれば人ふあふ^{本年長}

まうせも娘小松いふまれば人ふあふ

いふまうせも娘小松いふまれば人ふあふ

まうせも娘小松いふまれば人ふあふ

いふまうせも娘小松いふまれば人ふあふ

いふまうせも娘小松いふまれば人ふあふ

いふまうせも娘小松いふまれば人ふあふ

いふまうせも娘小松いふまれば人ふあふ

いふまうせも娘小松いふまれば人ふあふ

時^八 入れしゆに二葉の娘小松いふまれば人ふあふ

いふまうせも娘小松いふまれば人ふあふ

いふまうせも娘小松いふまれば人ふあふ

いふまうせも娘小松いふまれば人ふあふ

いふまうせも娘小松いふまれば人ふあふ

み^八 目もあつた時庭の娘小松いふまれば人ふあふ

社の日しちつ祝ふ人志非小松とをい
てやふ代乃松と誦（い）

續干
まふら子見小松（い）八百年代のまとい

久子見の小松と（い）やふ代乃松と誦（い）
所在
りへ松や志賀乃松と誦（い）たはしむる子見（い）

志賀の松松の年ぬらうに非せ（い）にみれ
子見ふてあつらじと（い）

新續古今雜言
子見すまの松にみれ松（い）の比をすれ
松の目すうとまの松（い）みれ松（い）はぬり
て松（い）はみ（い）の松（い）は（い）

養老とる松芥 かうみれ 松（い）せり

大和
とみれ かにみれ けだの系 いくみれ小松

正月七日松（い）はみれ松（い）つじ事（い）は（い）みれ
みれ（い）て（い）は（い）の（い）は（い）みれ（い）又（い）年（い）みれ

みれ（い）つ（い）は（い）みれ（い）は（い）みれ（い）は（い）みれ（い）
松芥つじ（い）は（い）みれ（い）は（い）みれ（い）は（い）みれ（い）

わ（い）は（い）みれ（い）は（い）みれ（い）は（い）みれ（い）は（い）
芥つじ（い）は（い）みれ（い）は（い）みれ（い）は（い）みれ（い）

り（い）の（い）は（い）みれ（い）は（い）みれ（い）は（い）みれ（い）
月
ま（い）の（い）は（い）みれ（い）は（い）みれ（い）は（い）みれ（い）

心よハ松の意ふ消るに都ハ我人れつと多
 疎ハハ松の意ふも消ぬに都ハ我人れつと多
 世人のわかれつとて心も消るに都ハ我人れつと多
 心よハ松の意ふ消るに都ハ我人れつと多
 心よハ松の意ふ消るに都ハ我人れつと多

後人の爲に後しけしむに
世に生れし世に死すの如きなり

生田此小姓より里人の行く出てお茶を飲まばは先を
 後人の為とばかりしてゐるに私云生田此お
 茶を飲むてはお茶を飲むにきくよりなり
 のことくありやし内裏へいもろよりわうき
 生田の小姓とわきハ常にお茶を飲むにきく
 君とあふ田乃決よりくつびとわきハ後人の
 更うそとあふ田乃決よりくつびとわきハ後人の
 君とあふ田乃決よりくつびとわきハ後人の
 更うそとあふ田乃決よりくつびとわきハ後人の

○ 白馬節

一条禪因 流白字ヲあそとむりいふ青

馬節會と申しされし事と仰ふに同ふ云し

又いかにて書くるにハ筆毛ヲ用紙也

正暦の七日白く節とす。けしき年々始はけ
 うとされしけしきより今より今より
 よりて七日御門乃に前より事なり式流
 節正暦七日は陽の穀しき日也。是よりて
 正月七日とされし年々此節とす。とす
 きては天と地と云ふ又あり。御門と
 せし一處に是ハ三ノ方なり。是より寛平

御記

あまの鴨の羽ふ乃をとるは多し久い限りありと云
鴨の羽ふれ青に地おれも何とる也云芦
毛といふ

震

春
書

八五辰

新為

夕陽

萬世

たひ

萬年

多々

二名の實心

萬の教

又ありしなり

半

[illegible]

沖の小島にありてつと何れ物ぞありて字に
河島の麓にありてつと何れ物ぞありて字に
佐保姫の麓のうゑにありてつと何れ物ぞありて字に
つと神ありてつと何れ物ぞありて字に
あのかみありてつと何れ物ぞありて字に
縁裔にありて

古
まゝありてつと何れ物ぞありて字に
あのかみありてつと何れ物ぞありて字に
つと神ありてつと何れ物ぞありて字に
つと神ありてつと何れ物ぞありて字に
つと神ありてつと何れ物ぞありて字に
つと神ありてつと何れ物ぞありて字に
つと神ありてつと何れ物ぞありて字に
つと神ありてつと何れ物ぞありて字に
つと神ありてつと何れ物ぞありて字に
つと神ありてつと何れ物ぞありて字に

あのかみありてつと何れ物ぞありて字に
まゝありてつと何れ物ぞありて字に
つと神ありてつと何れ物ぞありて字に
つと神ありてつと何れ物ぞありて字に
つと神ありてつと何れ物ぞありて字に
つと神ありてつと何れ物ぞありて字に
つと神ありてつと何れ物ぞありて字に
つと神ありてつと何れ物ぞありて字に
つと神ありてつと何れ物ぞありて字に
つと神ありてつと何れ物ぞありて字に

おゝあふくもあや姫まじりなりませしよりなり
おゝあふくもあや姫の涙あまき家八郎の
つと神ありてつと何れ物ぞありて字に
つと神ありてつと何れ物ぞありて字に
つと神ありてつと何れ物ぞありて字に
つと神ありてつと何れ物ぞありて字に
つと神ありてつと何れ物ぞありて字に
つと神ありてつと何れ物ぞありて字に
つと神ありてつと何れ物ぞありて字に
つと神ありてつと何れ物ぞありて字に
つと神ありてつと何れ物ぞありて字に

とるゝわらへ

鹿をや鹿とてん武苑野ふはるこはる雉子峰に
 雲を鹿とてん武苑野ふはるこはる
 雉子峰とてん武苑野ふはるこはる
 おやふそつ葉ははるこはるこはる
 花うと云ふうとて雉子峰とてん
 花うと云ふうとて雉子峰とてん
 ては花うと云ふうとて雉子峰とてん
 のは花うと云ふうとて雉子峰とてん
 雲を鹿とてん武苑野ふはるこはる

美濃のまはまれと小垣のふねり系れうと
みとらとにんゆうととねのうとくまゆりまてゑ
乃まはまれとととらうまれと

新垣よりぬけのしるしを
 かくれぬけのしるしを
 かくれぬけのしるしを
 かくれぬけのしるしを

月報上
 浪よりなる松のあつてもとてまたあやふれがやううと
 浪よりなる松の下枝をとてまたあやふれが
 天橋よりと海中より出る海橋よりと松
 原の橋よりとこれと橋よりと云はれ橋よりと

わう寸子恆と謝海とわう

何なる貴きものつゝ橋はとれず酒と雲
 蘇山

昔の共同継柄をわかれす妻あやう

ふろとて下巻回の名なり

足つなぐれぬ破れ松の葉もさくすくすむ
 実家

高しふくれぬ城乃松の葉に金ハすくなく

子心まじ毛六万葉よりみくといふ

わが礫の葉をわが子に伝へて
あはれを

にやふと云うをぢやうき
にやふと云うをぢやうき

いりあふ紙の葉はこれいさくすといふ

源氏物語

すゑてくらねひゆる名所いふうと長

うつくしむは万葉の歌とおいてあり

新
なご乃海のあはれをいひて入見の
仲は

船中満の爲に後よりとすは免れし入りと

仲津白浪の
凱晚震方至
入日臨

わふといふ下句は、腰乃録を

あつてこそ
精進の心
なりけり

名抄子
乃形在海津
奈吳海
乃月とあり

朝日寺蔵乃寺之書村清七善の爲にふふふ
 子

又うきと云ふはしらけりもつらうれしうれと云

ふかきうり 嬾字をいふはれきうりは僕し

後 竹ちく木底祢いせし言れりと思ふけいおいせしを 伴南物ト

竹のちるをふは一夜底ひすゆし言ふも鳴

色とすいお祢きれぬとし驚ハ竹 ぞ祢

くくしすゆれしはしめあつたの竹は

夜底祢しよとあしおいしおひし夜底

祢おひまきとふし青れ并乃とゆし

驚の夢うせい言ほぬふ里いつてまを お志抄中勢

うきいものと思ふすし言れぬふ里は

いつてまをさういふし

まふしや祢のま枝は言れし思里うきうめあん

うきう祢うき言の言乃とあて里うき

夢の始めなりとあり

新 様うまふしうきあひし涙ききけり言れ 系人

まふ比くあ井うてうきいおまを

しとけふしつらうきいふし

新 梅うきあてうきうき言のまひ妙は阿も言え

梅の枝うき言のまひ妙は言れし

新 言うきまふしうき言のまひ妙は言れし 言

うつろふ花は凡そ咲きつゝものなり

西樓月落花同曲中ぬ焼残の裏音 西樓月の
かつらわらぬ花の枝より雪はふつゝふあ
なりろくろと曲や云々殿は灯りのう
のこりたる花をかくれり裏より雪はふつゝ
ゆらと云々ぬは云々殿は灯りを村上天
宮の御子後中書王よりは縁えりうら
志信と外記尊敬はけられろ女房乃
こゝて月かつらふと月うつてはじ
川裏のあふろふゆと川裏はゆとと

も教はぬや云々とてドクれと廣韻より
御覧もろよ志のうらとて彼女房は
ぬく物として後養へはけられ

砂雪 あん雪 こゝのうら雪 雪はじつと云々

雪は下ろ 雪まのろ

去年乃雪の砂まのろとわら玉は年立ゆで
ふれろの雪とていへ一橋うらにふれろと
見てはいつとて花とていへ花はゆとて
梢より咲のていへい雪ははる雪ははる
とていへと雪のていへ雪のていへ雪は

わきうらと面れまものうらぬのうらぬのれん
といふといこくうらと

じやう

陳字を

曾孫うらとせり

ふははそつとえんまのけがひくうけれあま

えはまよれにふれりうと源氏まうたけ

うと源氏まはまよはれあひすてわれしより

新張

めかて煙やうにゆきまはさううわうけのま

雅孝

めかてこつにわきまのゆいとも野色の

まきこもくもくといふを煙うめうといふれ

えはるめの月つとてみたりまをとも煙う

ゆきとふといつり

めかてゆきとふといつり

後ろのれん

まわうまもほもくうと雷にけしやうてけ

まわうまのまもくうと

○草 八重抄 うのひあままをせまけれ乃あや

まわうまをえといつりまのまに能きえまま

まわうまをえといつりまのまに能きえまま

まわうまをえといつりまのまに能きえまま

まわうまをえといつりまのまに能きえまま

まわうまをえといつりまのまに能きえまま

東のいふくく白まにえつりまの
ひまうまをえといつりまの

家の通海より葉をきくとその毛は直轄の
文よりけり我身ハ小人にてわれも昔乃顔
淵の美から同くすわつとの相し

草久雪晴初布簾 雪晴とふ雪のとく然也
雪晴もハ葉乃いろころ也 希儀もハ
葉乃いろのひくもすらとろり

花山有馬蹄猶露 傳野 云久洛湖 滋 保家

花山ハ長安城の如くわつ其よりそを葉
忘れふ下のれも牛ふと放飼也 去草
いすいかいのむとしていけりわつろくとい

満浪と云者け花山を詠て葉久にゆふ
まれといふと終ふふてゆふ花守れく
れといてふふとゆふ葉てみきる葉と
人きとふくわつといふと詩は堪笑華と
苗蔭上又添満浪倒騎驢と云りされ
凡葉ちりふふと一傳野と云れハ葉
ふくてふふけは傳悦と云者葉と
川をとけりふふと殷高宗皇帝賢人
と葉よりふく其葉はふあせて隣
田をきくふけ傳野より葉とけり葉小

やすもまのいふまにふくまのふくまをいふ
やすもまのいふまにふくまのふくまをいふ
あつちのふくまのふくまをいふ
てふくまのふくまをいふ
やすもまのいふまにふくまのふくまをいふ
つたもいふまにふくまのふくまをいふ

○賭弓 正月十八日あり

ひううの御門射場ふくまのふくまをいふ
仲まふくまのふくまをいふ
迎東ふくまのふくまをいふ

大の射ふくまをいふ
まふくまのふくまをいふ
つたもいふまにふくまのふくまをいふ
やすもまのいふまにふくまのふくまをいふ
あつちのふくまのふくまをいふ
てふくまのふくまをいふ
やすもまのいふまにふくまのふくまをいふ
つたもいふまにふくまのふくまをいふ
庭の白洲をいふ

梓^レりまれをみよひくまてぬがう^五的の事

まのせみうひをまてぬがう^五的の

まれふこあうとあり右あ局六百番を歌合

一寝更とれり

梓^レり村まの目と川つきてゆりつそけふとあり

村まの目と川つきてゆりつそけふとあり

つまじきういふと此のうさうあり

梅^レ梅^レ梅^レの三枝 垣根の梅 あり梅

折れ梅 家の梅 梅はまき かりふほよ

凡のふくはふ里の垣根とぬの長なれ枕り白

ひをみり見たの神まつ白ひとていひま

枝とて人のいふとていふ事の下にも

きくこれわうとていふはうをきくあり

くく夕言はいつ日いつ日とていふを

ふむ梅れ花とていひてふ言れぬよめとて

八重にふれ花 りくは梅

ふくまのうさうとていひてふ言れぬよめとて

より言のうさうとていひてふ言れぬよめとて

梅柳 何所の花とていひてふ言れぬよめとて

柳の梅とていひてふ言れぬよめとて

但昔遊ハハ大庾虎梅早落シ云柳ハ花の
ゆし古寺ハいつてむとあるも何う近代
いつてむといハ皆様あり

古
美のまやうやう梅のむきとらんやあうくを
春の衣のやういひや梅むの衣とをてんを
絲と香といふあうとあうとやういふと云
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
やの河ぞ又あひふふふふふふふふふふ
のまのりやうふふふふふふふふふふ
わやういふやういふふふふふふふふふ

古
久しういか^懐ふふふふふふふふふふふふふふふふふ

色香いふふふふふふふふふふふふふふふふふ
そつ神あり宿の梅とて香とてあうふふふ
香といふふふふ漢仙託ハ銀袖白
後乃花古情苗と云漢武帝の后張公
の神の香梅花とてうつて白ひとてあう
いつてあうふふふふふふふふふふふふ

古
美のまやうやう梅花とてあうふふふふふふふふ
美のまやうやう梅花とてあうふふふふふふふふ
こつものあうやういふふふふふふふふふふ

ふ系よりて雪のやうに雪は梅の花を
ふか秋をふしてふもむし安をふして
ふもく雪や雪うむひてふもく雪に
ふもく雪をふしてふもく雪をふして
系より梅の花をふしてふもく雪をふして

友則
ふもく雪をふしてふもく雪をふして

梅の花のふもく雪をふしてふもく雪をふして
ふもく雪をふしてふもく雪をふして
ふもく雪をふしてふもく雪をふして
ふもく雪をふしてふもく雪をふして
ふもく雪をふしてふもく雪をふして

梅の花のふもく雪をふしてふもく雪をふして

梅の花のふもく雪をふしてふもく雪をふして
ふもく雪をふしてふもく雪をふして
ふもく雪をふしてふもく雪をふして
ふもく雪をふしてふもく雪をふして
ふもく雪をふしてふもく雪をふして

拾調宜期夏^{ヨツス} 国帰 孤友 還 始 春 といふ

月

梅の花のふもく雪をふしてふもく雪をふして

梅の花のふもく雪をふしてふもく雪をふして

梅の花のふもく雪をふしてふもく雪をふして

梅の花のふもく雪をふしてふもく雪をふして

梅の花のふもく雪をふしてふもく雪をふして

あまのうらみかたうらみ

神あり梅ありぬ白ひて祢こりぬりまきなり
わの神あり梅ありぬ白ひて祢こりぬり
うまきなりこりぬり神ありぬを咲きなり
のりぬり根なり死や根なりて
こいぬりこいぬりぬりぬりぬりぬり
きをすぬりぬりぬりぬりぬりぬり
いなりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
まき根ありぬりぬりぬりぬりぬり
ぬりぬりぬりぬりぬりぬり

いなりぬりぬりぬりぬりぬりぬり

ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり

梅ありぬりぬりぬりぬりぬりぬり

ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり

わらわは海を梅にたう黒うう白くうん

ふりふりふりふりふりふりふりふり

ふてあるんや梅を葉を云云

梅むこ神あり白くまじうの月よこや

梅むこ神あり白くまじうの月よこや

人のまげまじやじうの月よこや

しういふまじ金まじう

浅茅原のふりふり梅むこやん

わらわのふりふりふりふりふりふり

梅むこ神あり白くまじうの月よこや

うらやまのふりふりふりふりふり

わらわのふりふりふりふりふりふり

まゐるふりふりふりふりふりふり

ふりふりふりふりふりふりふり

いふ

ふりふりふりふりふりふりふり

ふりふりふりふりふりふりふり

しほ氏ふりふり梅ハふりふりふり

終ふりふりふりふりふりふりふり

ふりふりふりふりふりふりふり

あふりふま面白くゆつと云り

窓梅小面雪封寒 小室ハ陰のちのち梅も雪に
しらしらとゆひつと云り

南枝小枝も梅用落己異 南陽小ハ陰のちのち南
くく咲てくくくく少陰のちのち咲て
とく咲てくくハ用落己なりと云

暖南枝花始開 ありつてかき南枝ハ花の
くく咲てくく

折梅花梅頭二月く雪落夜 是ハ吉日名詩乃
くく梅むとありてくくハ二月名雪乃ことく

神よりくく云

但懽大度万株梅 大度殿の万株多梅をきく
ふあてきくくくくくくくくくくくくくくく

くくくく

浅江群娟仙方く雪魄色 仙家の雪ハおははは
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

有色易分残雪庭 無情難并夕陽中

前中書

け物乃色ハ紅あれど夏の庭よりて赤白の
 冬もこれのけもハわらやうと云無情
 難奇と云を付けてるぬ人を毎ハ紅
 の色夕日ハわらけと云つてもわらふ人
 ちうかうと云

冬は梅のつぼみは
春は桜のつぼみは
夏は荷のつぼみは
秋は菊のつぼみは

さけいつを梅とわきてあふきあめの
本町の月をふくめつゝくむ

楊むうれもみん久立しやまふら言乃ててあれん
 そんれも雪のふくゆきを楊むうれ
 いてれもふくゆきを楊むうれ
 といはうす言ふしむすうすてて
 といふ面白ふしやまふらハれのう
 くれらなり万葉

夏のことと思ひてやうやう梅うらをきゝぬきや
棚音合電しやぬく梅むさぬはるたうとすまむ

逐吹テ潜ニ用不待芳菲タ之候コトヲ 約ヨク法ホウをたよ凡
 よひくうと云されと逐吹潜用と云
 冬月の子梅あれむうかよしと字と云り
 着梅の候とてうううと云ふハ二月の事
 こそ此ともしくすくはりいふ
 じくくと云留まはまはるは春といふ
 衛タニ薰ス臘ス雪新封裏ス 冬フユの梅あれと云く
 差サシじくくと云臘ス雪スと云師シ馳ハヤの要ヨウあり
 うううと云れと云くはるは春といふ

柳 青柳 玉柳 柳の系 川柳 花柳

少柳 春柳 冬柳 秋柳 夏柳

ふりふりふり

何うい柳はがひく枝ひるく下枝は
 りくも片枝は葉はゆるく保姫の
 赤い髪はていふ風のけつるも
 柳の糸といひくじりるも足るく
 保姫のえくもにうひるもよむ
 八重は
 源氏より柳と青いを折ててあうあうもて

新しきものにて、
下校を以ていふじり

是ハ此處より校の稻乃延に及る

淡泉より聖と白あま玉を分けよ 是れ柳屋昭

全照

美の柳をさうの糸よりむく白房と玉

うつゝふらふらとみくらをうす

みづの極乃又より極六柳を

柳の志は、方々東ににほひを、柳の氣とて

[illegible]

伊勢
こころ

柳の系をふりて芳きぬいし所 祝

のふれうくひをのまらんとて

五月柳の糸より糸をなれてむいばとあひなれ

卷之

柳の糸より髪をなぐる比の雲を散るか

こゝろひつらゝも糸のそとくと云ふ何て也

七ころろとそ

風舟ハ柳の系乃こよふのひるはほそてふりまふ

院御製

色の子け柳の糸よりやううねひく

美ハ過津芳ヲ極クニシテ

五
依保姫乃歩これ髪乃玉櫛と云凡えけり
多_{這房}

迂腐

天姥乃折之玉樹ハ雲凡乃呪毒

みくちるにふちと

ふふのゑのゑ乃うとみとつて柳のふよりなり
ふふのゑのゑ乃うとみとつて柳のふよりなり
わけて柳のふよりとつてなり

ふふのゑ乃うとみとつて柳のふよりなり
ふふのゑ乃うとみとつて柳のふよりなり
青柳の糸れもつて柳のふよりなり
涙るゝといふ乃うとつて柳のふよりなり
ふふのゑ乃うとみとつて柳のふよりなり
ふふのゑ乃うとみとつて柳のふよりなり
ふふのゑ乃うとみとつて柳のふよりなり
ふふのゑ乃うとみとつて柳のふよりなり

ふふのゑ乃うとみとつて柳のふよりなり
ふふのゑ乃うとみとつて柳のふよりなり
ふふのゑ乃うとみとつて柳のふよりなり
ふふのゑ乃うとみとつて柳のふよりなり
ふふのゑ乃うとみとつて柳のふよりなり
ふふのゑ乃うとみとつて柳のふよりなり
ふふのゑ乃うとみとつて柳のふよりなり
ふふのゑ乃うとみとつて柳のふよりなり

柳乃系まれくはす又浦うしそふゆし云々

ふのうひてもあふふとつて

いふは少つふとく風はむとらん木子柳乃系

いふれふのー風乃の風はむりいふ

ま柳の系むとらふんしり

ま新風乃の系むとらふんしり殿富門院入柳

まは夜しといふ風乃の系むとらふ

ふふれくもひくま柳の系むとらふ

くハ風乃の系むとらふて改改し

こくぬれはふとくもくもく風乃の系むとらふ

の風くハ系乃みされてふあつふ事也

ま同風乃の系むとらふ雅經

白雲乃流るる風乃の系むとらふ

ふそま柳のつとく云事乃のわねふ

いふもくもくもくもくもくもくもく

ま柳といひて風乃くもくもくもくもく

ーくもくもく

ふれへの柳乃柳まれくはす又浦うしそふゆし菅

柳乃の柳はまれくはす又浦うしそふゆし

ふそま柳のつとく云事乃のわねふ

減知老去風情少見は争か無一句清

白居易それをしてゆきて万事凡流あり
事のよみけしは柳の緑またやうれを
とてはいっての一寸乃清と詠さうじやと云
のを化まう

愁宅定晴を月暗陸池逐百水蟾深

柳虚と云老乃家の柳は果して緑なく
あれを定は晴れも夜は月がそひり
うらと云陸恵の池乃柳は緑のよみけし
とあれは柳はゆくうらそひり

人の住居し柳を載てるなり

潭心月泛交枝桂 さらけうこし月乃うへ

柳の枝と月宮乃桂の枝とをうらとて
とあらとそり潭のハ側庭あり

毛線終か陶門柳 毛線とて何を糸系

と陶淵の門乃柳ハまふいふと事
くそを中とやういふ人の住居乃門ハ本
の柳を載てるいれと柳先生と云

早蕨 葉のうら ち

さういふ初うらとさういふいふを

源氏物語卷は倭迹塞宮より八桐壺門の
八文源氏より涉身のか冷泉院の美文これ
河東崔院の河母后とよこはは田舎りもく
これ八文と佐つた也なるとてくはせり
きりよの河やもなまん源氏のもとの
らすうなせしうけとれりもろく八条は
あつてすもは流はすもの河へやをれと
佐うれく都のまういもつてくきりて
宇治はさうふのゆきうつてすもは流を
まうれそ宇治はさうやていりあてり

けふいよいよ月夜を待たせよとて仰くけしきも意
大なりといひわかしやういねて常くういねは
えねえやうのらな母思はうやう大にれ
いねてあつていつ迄もえりびくられぬ
思ふけえねいりご思ふもなめりとも
くずりねえまゐいふれえりてうに木
のいねけられも雪のえりも二人の非表
を小方のいねんとかぎていりくとえこれ
よりすてやいねうのわがじな家送りま
しめねいりともくのえりゆりて道なほ

聖乃かりにこいしはしきふりやせしき
御門よりやう後ちなては又こつて終

世といふはふりや人ききききやうう

ふりやふりやふりやふりやふりや

泣泣ていふはふりやふりやふりやふりや

こふんうー泣ける 総角奏子 姉恵いふりや

よりこふりやふりやふりやふりやふりや

ふりやふりやふりやふりやふりやふりや

ふりやふりやふりやふりやふりやふりや

ふりやふりやふりやふりやふりやふりや

ふりやふりやふりやふりやふりやふりや

ふりやふりやふりやふりやふりやふりや

ふりやふりやふりやふりやふりやふりや

ふりやふりやふりやふりやふりやふりや

ふりやふりやふりやふりやふりやふりや

ふりやふりやふりやふりやふりやふりや

ふりやふりやふりやふりやふりやふりや

ふりやふりやふりやふりやふりやふりや

ふりやふりやふりやふりやふりやふりや

ふりやふりやふりやふりやふりやふりや

われやいまぬこころひてゆとば隅花と
ふれおさるゝとねの事しつゝてわれ
やいまぬいれをわれやいすこゝろいあ
といふ事と放埒の事なりとてれ事
とすくひとくひとつひれとて秋
郭とて思ふ事をもあはれいこゝろあはれとて
へやいまぬ祈恒かよふ事あはれとてこゝろを
よとていふとくひあはれ

桜色^にうけふはてふ花のうけふはる^{紀有安}

さうとてふ花をいふくはてさうとてふ花を

うけふはるのうけふはる^し花のうけふはる^し
隅花れ花のうけふはる^し花のうけふはる^し

さうとてふ花のうけふはる^し花のうけふはる^し

人あはれとてふ花のうけふはる^し花のうけふはる^し

花のうけふはる^し花のうけふはる^し花のうけふはる^し

花のうけふはる^し花のうけふはる^し花のうけふはる^し

花のうけふはる^し花のうけふはる^し花のうけふはる^し

さうとてふ花のうけふはる^し花のうけふはる^し

花のうけふはる^し花のうけふはる^し花のうけふはる^し

花のうけふはる^し花のうけふはる^し花のうけふはる^し

を^た蟬せすもふらむも蟬をえしにけりなり
うみとれしれうせしにふも蟬をえし
やうてけりなるしを蟬乃せしれさ
せのふらうてを蟬しを蟬れぬ
けといふ同集志卷も可ふなう蟬
鳴くしを蟬のふもふらう
せ貝といふも力もけ貝しを蟬を
蟬をいふも常ふふあれもうらう
ふあふ又ふのふも蟬といふてふ
くう蟬田ふてふとれと蟬といふ

いふてけりし又蟬といふし
ふにふらむ蟬なりといふ

蟬^たなりけりしをいふてふも蟬を

けりしをいふてふも蟬を
けりしをいふてふも蟬を

蟬^たなりけりしをいふてふも蟬を

けりしをいふてふも蟬を
けりしをいふてふも蟬を

けりしをいふてふも蟬を

蟬^たなりけりしをいふてふも蟬を

けりしをいふてふも蟬を
けりしをいふてふも蟬を

もいふにのこるやなれんうういふ
るのふれ炭乃白きしつと中よりほふ
そいふはきききききききききき

山橋笑そりう久しれを井小なる龍乃白系
ふさうれ笑そりう流のさ系れを井
ふさうれとさうれとを流しとせう
ふさうれとさうれの流のさ系れを井
ふさうれと

高減やたう海の橋笑そり立田のわくはから
立田のわくは白きうれきうる乃橋の

笑ふにいふ并ハ後多院こ神乃并り
さうりう

ふさうれ人うん橋むいふわくあつ
ふさうれの人うあつはうれくまれさむ
ふさうれふりてあはふさうれいふあつ
ふさうれ世俗ふやけとふさうれ万葉ふあ
つてふさうれいふ都のほくふあ
もてふさうれ

橋らふ下凡いふうてふさうれわくあつ
いふのうらふあふさうれわくあつふさうれ下

凡いそしめ

橋^新らるるまはらへうらまはせとふれとこし^白い

橋^新らるるまはらへうらまはせとふれとこし^白い

橋^新らるるまはらへうらまはせとふれとこし^白い

橋^新らるるまはらへうらまはせとふれとこし^白い

橋^新らるるまはらへうらまはせとふれとこし^白い

橋^新らるるまはらへうらまはせとふれとこし^白い

橋^新らるるまはらへうらまはせとふれとこし^白い

橋^新らるるまはらへうらまはせとふれとこし^白い

橋^新らるるまはらへうらまはせとふれとこし^白い

橋^新らるるまはらへうらまはせとふれとこし^白い

橋^新らるるまはらへうらまはせとふれとこし^白い

橋^新らるるまはらへうらまはせとふれとこし^白い

橋^新らるるまはらへうらまはせとふれとこし^白い

橋^新らるるまはらへうらまはせとふれとこし^白い

橋^新らるるまはらへうらまはせとふれとこし^白い

橋^新らるるまはらへうらまはせとふれとこし^白い

橋^新らるるまはらへうらまはせとふれとこし^白い

橋^新らるるまはらへうらまはせとふれとこし^白い

橋^新らるるまはらへうらまはせとふれとこし^白い

れこてよあるしとくしとて
涙てふふまのいふふあふくきうあ
右の花は笑とわてらるをわくしとてほくしと
おれしとてのいふふあふくきうあ
世俗に暗まらるるふとていふふあふくきうあ
春くれしとてふとていふふあふくきうあ
こしとてふとていふふあふくきうあ
しとてふとていふふあふくきうあ

訂正

己里乃まれば夕言ふてこれ入おれしとて
己里のまれば夕言ふてこれ入おれしとて

結句

おれしとてふとていふふあふくきうあ
おれしとてふとていふふあふくきうあ

千

むにむのいそあふくきうあふくきうあ

知信

世とすてふとていふふあふくきうあ
世とすてふとていふふあふくきうあ

新巻様

むにむのいそあふくきうあふくきうあ

後が

面新し花乃あふくきうあふくきうあ
面新し花乃あふくきうあふくきうあ

あふくきうあふくきうあふくきうあ

雅經

あふくきうあふくきうあふくきうあ

跡乃あゝとてし凱羈旅花なり

機花笑わす河ハ葛城乃とれとていふれあゝとてみづ

むの笑われとてうきふの笑とてあゝとていふれとていふ

秀并とていふ順徳院の御歌とていふいふれあゝとて

うけれとていふのさふさから白とていふとていふとて

雲とていふの雲同歌とていふとていふとていふとていふ

^續うけれとていふのさふさから白とていふとていふとていふ

とていふとていふとていふとていふとていふとていふ

の友道とていふとていふとていふとていふとていふとて

むのさふさから白とていふとていふとていふとていふ

お持歌とていふとていふとていふとていふとていふとて

とていふとていふとていふとていふとていふとていふ

海とていふとていふとていふとていふとていふとていふ

といふとていふとていふとていふとていふとていふとて

^續子とていふとていふとていふとていふとていふとていふ

後とていふとていふとていふとていふとていふとていふ

むのさふさから白とていふとていふとていふとていふ

あゝとていふとていふとていふとていふとていふとていふ

機花みづひとていふとていふとていふとていふとていふとて

さゝとていふとていふとていふとていふとていふとていふ

志は浦原の乱より始りてあり

た
笑はふいけみわらひを身になれりてあり

親と面白と云ひて辛勞と云ふは人の
つらさの益ありと云ひし禪因に就し

还家

紅
花堂殿の衣にしろいて炭をふふのわはくふ

ちのさるまゝなれども
 のちの秋にうひて
 成るまゝ

スミヤカニシモハミヨテ、反ルナクシク考ヘテ

衣はとふまねとふとわるとなり

ふれ川流のきくはるるや里あのをられ凡てうらよ 慈因

茲因

そはらねの物にやぶさるとりせむる信

くろよと云ふの酒つゝい面白きを酌せし
酒

の足跡を凡そとせしむるを榜をうけつとせり

さく動字ありたぬ者三旗のすて

ふの端は月満ちての白より花より紅より美れなり

定

ふのころ月とわかれぬをれ白よりむ

月の灯をうつろひて
宵蛇共隣深夜に

云と流るうしろのふたは花子

ふじくと云う

わさぎの月を記をにめくゝと表されん人日るや

心此六人可仙三

信

こゝに虫の面白うけを花と云ふと可なり

志士人月と親を断るは色を断る
ぬきぬきむしむし行ふこと

源氏物語のわかれをうたふ

わんぱくころのうしろ面白と云ひ

のあれと此六人の言仙はあや
源氏河のよはたうさう

源氏物語の八たより

新古今
芳野山より
あけぬる花と
るん

ふれはをいれまのきりりわるとてよし

ふねと花とふいとてを捨てて

あつゝふくし志保のふきぬふ海は

とて柔木の枝より一丈一丈とをくし

月
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

義のさるよれは良果なるべし

しつりつりみちをわたりて花をさか

里小川と河原の系親をいふことはさう

あるふとふと現るゝとある

天ありとてありあり

旅のむらさきとて面影さぬ妻乃元 経信

たのむさうに過ぬれも下り新抄

妻の元でわくとつり

月
むいふひのふん
はまろ漕舟
船のたもろすて
高所

わろしつら其しおしつら又字万事をぬ
くちりし心量しとせよ乃執着の心を
あへんぞ

尋^同て花をくさるるをゆきと花はあはれ
あはれ花のよきにのみなる光り
さるにゆきと花のよきにのみなる光り
外なる事これ常に月をゆきと花はあはれ
函蓋おぬれぬ糸糸の心をあへんぞ
しるしと花のよきにのみなる光り
あはれ花のよきにのみなる光り

遥^三見^二人家^一花便入^二不^一論^二貴^一賤^二与^一親^二疎^一なるが人
の家とるに花乃咲自^二あ^一る子とるを
れし貴と賤ととるに花乃咲自^二あ^一る子とるを
りてよはれり

織^三自^二何^一線^二唯^一春^二雨^一裁^二定^一様^二但^一云^二風^一 菅三

花の綿と織糸はくさるるの糸裁事ハ定
まらるる花の糸はくさるるの糸裁事ハ定

始^三織^二春^一風^二横^一上^二巧^一非^二唯^一織^二色^一織^二芳^一 英明
と始く春風横上巧非唯織色織芳
花乃紗と織糸はくさるるの糸裁事ハ定

とろのくにわすれ花芳きて霞の白ひと
蔵のうらとつり

花下忘帰因表系 花の陰はまらなるあぬて
ゆふくさまをわすれといひて系よりつり
さるへりといふ

長樂障舞花外画 漢の祖の長樂殿
障乃し思ひあゆまぬ花のわすれを白雲の
ゆかりに言やうてるあをむのわたり
まらといふといふ

花の色は花のうらとつり 内入

けしきのうら

花のうらとつり 人ののれとわすれ小を
やうてといふといふにむのうらといふ
のうらといふといふは名沙といふ
といふといふといふ

狀風く不定風起蕭索 風といふといふ
凡のうらといふ風乃て花のうらといふ
蕭索といふ風のうらといふ

花のうらといふ風 花のうらといふ風
花のうらといふ風 花のうらといふ風

書板花落多先啼

まは言の板よりむの

あまののくハ花をわらわきりて
わきりてわきりてわきりて

花多散又涙涙秋凡家むいしむ

多いらりぬきハわきりて涙と
乃くわきりてわきりて

○遊練

わきりてわきりてわきりて

わきりてわきりてわきりて

わきりてわきりてわきりて

わきりてわきりてわきりて

わきりてわきりてわきりて

わきりてわきりてわきりて

わきりてわきりてわきりて

わきりてわきりてわきりて

わきりてわきりてわきりて

わきりてわきりてわきりて

わきりてわきりてわきりて

わきりてわきりてわきりて

わきりてわきりてわきりて

まふれんやふんてふいゆをいふやふん

まふれんやふんてふいゆをいふやふん

まふれんやふんてふいゆをいふやふん

野菓芳菲紅錦地遊絲繚亂碧羅綾出錫

春のゆくえ菓芳菲のゆくえ

ゆくえとふんてふいゆをいふやふん

ゆくえとふんてふいゆをいふやふん

着野展敷紅錦繡當天遊織碧羅綾

ゆくえとふんてふいゆをいふやふん

ゆくえとふんてふいゆをいふやふん

ゆくえとふんてふいゆをいふやふん

ゆくえとふんてふいゆをいふやふん

ゆくえとふんてふいゆをいふやふん

ゆくえとふんてふいゆをいふやふん

ゆくえとふんてふいゆをいふやふん

ゆくえとふんてふいゆをいふやふん

ゆくえとふんてふいゆをいふやふん

ゆくえとふんてふいゆをいふやふん

ゆくえとふんてふいゆをいふやふん

の二字並ハ清凌と云字をすへるぬいも

ちとわり名部まふとくくくくくくくくくく
 字とくわくくくくくくくくくくくくくくく
 えうくくくくくくくくくくくくくくくく
 のらいうくくくくくくくくくくくくくくく

辭^ス林^ヲ辭^シ燥^ハ還^ニ翻^シ翻^{ハス}於^中一^ニ月^ノ之^ノ死^ニ上^ニ服^ス
 是^ハ因^ニ

二月の初し、まへ九旬うかづりて、いひさる
 衆候も、いふ二十日ふくらまふまであり、あ
 けよりいひゆりて、おもしろくさうさうあり

源氏より上梅機より下に下は多日人
跡に人にて跡多乃舞とより也治多れこよりハ

志ろくのあは櫛とてきて櫛とて
 志ろくとてきてもて櫛とて
 志ろくとてきてもて櫛とて
 志ろくとてきてもて櫛とて

花うねりこころをふり下葉秋の風はうきとふん
中々いひ

こころもけうにれきりゝのわりて八重山乃てさう
けうなよ小珠といふ巻乃名をよ

春雨ニあめくると光 衣くるとめ やういりぬ
雲あはしくくると果す方いとふりきりて

るこひもあはれよはあとしもしははれぬる
あふれ人の涙もあはれなるは川に海さね
しもあはれあはれふくあはれふくといひ
あはれふくあはれふくあはれふくといひ
あはれふくあはれふくあはれふくといひ

様

あはれふくあはれふくあはれふくといひ
あはれふくあはれふくあはれふくといひ
あはれふくあはれふくあはれふくといひ
あはれふくあはれふくあはれふくといひ
あはれふくあはれふくあはれふくといひ

我

あはれふくあはれふくあはれふくといひ
あはれふくあはれふくあはれふくといひ
あはれふくあはれふくあはれふくといひ
あはれふくあはれふくあはれふくといひ
あはれふくあはれふくあはれふくといひ
あはれふくあはれふくあはれふくといひ
あはれふくあはれふくあはれふくといひ
あはれふくあはれふくあはれふくといひ
あはれふくあはれふくあはれふくといひ
あはれふくあはれふくあはれふくといひ

たふもいふ都ありて垣海より流るる川をい
つちこつたのれり跡は海はわたりまはれぬ
後我もいふとて一橋むねいふとて人の言のまね
後まねしうふとて海より一橋むねいふとて
橋のたよりいふといふとてまねし
世より海よりいふといふ

ふのふもいふとて海よりいふとて
まねしうふとて海よりいふとて
むねいふとて海よりいふとて
むねいふとて海よりいふとて
むねいふとて海よりいふとて

いふ父母といふとて海よりいふとて
むねいふとて海よりいふとて
むねいふとて海よりいふとて
むねいふとて海よりいふとて
むねいふとて海よりいふとて

常盤よりいふとて海よりいふとて
むねいふとて海よりいふとて
むねいふとて海よりいふとて
むねいふとて海よりいふとて
むねいふとて海よりいふとて

ふかきみちをさへあふといふありむしむし
いつまゐのすれどつゝあひわつしといし
涙なり玉のなみちを柳の枝とをいふあを
おろしきみちを柳の枝とをいふあを
あふといふ柳の枝とをいふあを
あふといふ柳の枝とをいふあを
あふといふ柳の枝とをいふあを
あふといふ柳の枝とをいふあを
あふといふ柳の枝とをいふあを

龍池柳色雨中深
天よと就またさるあり
大義の池と竜池とをいふ柳をいふ

養得^ま自^ら為^る花^は父母^はまゐるあり
てわくしういひてあふあり
やういふてわくし

花^は新^し開^き日^ひ初^は陽^は洞^は鳥^は老^は歸^は時^は落^は暮^は陰^は
初陽洞といひてまを陽ふといふ
初陽といふ洞といふまを陽ふといふ
まを陽ふといふ洞といふまを陽ふといふ
まを陽ふといふ洞といふまを陽ふといふ
まを陽ふといふ洞といふまを陽ふといふ
まを陽ふといふ洞といふまを陽ふといふ
まを陽ふといふ洞といふまを陽ふといふ

つらき老てとてい老乃常とてと

○春のびるま田のむつとれまのついふるつ

いふつ ありつ せむとめとあつ

難波にはまのつぬ

いふつくついふつはつとつになつとつ

そつらふつつやふつとつとつとつ

めとつれつとつとつとつとつとつ

じつに目とつとつとつとつとつ

ふつとつとつとつとつとつとつ

ふつとつとつとつとつとつとつ

ふつとつとつとつとつとつとつ

ふつとつとつとつとつとつとつ

ふつとつとつとつとつとつとつ

ふつとつとつとつとつとつとつ

ふつとつとつとつとつとつとつ

ふつとつとつとつとつとつとつ

ふつとつとつとつとつとつとつ

ふつとつとつとつとつとつとつ

ふつとつとつとつとつとつとつ

しよまはのうらる海へうつさぬ物後ををれり

天摩乃はのうらる海をまはなる物

ふれもわらう

しよまはのうらる海へうつさぬ物後ををれり

天摩乃はのうらる海をまはなる物

ふれもわらう

しよまはのうらる海へうつさぬ物後ををれり

天摩乃はのうらる海をまはなる物

ふれもわらう

ふれもわらう

○ 帰馬 雲のうり 名流りかり

むとんそとてゆふのそやと雅に歌く

雲海をわすれし帰るんとてさひやの

ありし雲をわすれし雲海にそらりし

ふれもわらうをわらうをわらうをわらう

にーそ又さび秋もをらうのけしとく

雲海にさび雲をわらう何ふいさるし

ふれもわらうをわらうをわらうをわらう

ふれもわらうをわらうをわらうをわらう

ふれもわらうをわらうをわらうをわらう

るひ觸るるゆくはいてり

津守國基

^むすまはくまつてもみぢかすもるそはゆり居る

萬葉くまつてもすじにゆり居るあり
くみりりるる居るくみりるる
くみりるる二ふりりるるにふりり
くみりるるすじに居るぬり居る
くみりるるくまつてもみぢかすもるそは
いふてもみぢかすもるそは
今いふてもみぢかすもるそは
わらわいともみぢかすもるそは

ゆり居るくみりるるくみりるるくみりるる

美の居るゆりくみりるるくみりるる

ゆり居るゆりくみりるるくみりるる

ゆり居るゆりくみりるるくみりるる

美の居るゆりくみりるるくみりるる

ゆり居るゆりくみりるるくみりるる

ゆり居るゆりくみりるるくみりるる

大^同定乃浦よりくみりるるくみりるる

くみりるるくみりるるくみりるる

浦よりくみりるるくみりるる

漢古

たけのこにあらまきし神を海にたてしりん

中流ゆく舟の名沙をけしきしきしき

しきしきしきしきしきしきしきしきしき

四

いづれにすむる世に藤原の月をとりて

衣笠前内大臣

ほろくしきしきしきしきしきしきしきしき

居るゆゑしきしきしきしきしきしきしきしき

いづれにすむる世に藤原の月をとりて

こゝろはゆめしきしきしきしきしきしきしきしき

八道前太政大臣

いづれにすむる世に藤原の月をとりて

あそびにすむる世に藤原の月をとりて

いづれにすむる世に藤原の月をとりて

いづれにすむる世に藤原の月をとりて

依保姫のかりし妹をみよとてやまゆり

いづれにすむる世に藤原の月をとりて

古

美家とてみよとてゆきしきしきしきしきしきしき

作務

いづれにすむる世に藤原の月をとりて

いづれにすむる世に藤原の月をとりて

山腰の厚斜牽帯水面新虹未展巾 在甲

いづれにすむる世に藤原の月をとりて

いづれにすむる世に藤原の月をとりて

やいぬくみんをこころうのうといふ

○雄雄子あふいかふきんをさう雄子

まうゆふあふのふいふを志を守て

猫人のうろふといふまをれをれ名を娘の

中いふを思のふちゆくてまやうなま

とわれぬー

ハヤヒふさう雄子といふをさうい

やふけの雄子妻ふいふをさうい

こりこりうのうさ雄の事い目か記

かふ志の雄もいふいふの使あふさうい

あふ桂のふさ丹々天雅に記山梁

雄の美名し 論語山梁雌雄可哉

まの時とてさういふ

まのまはさう雄子あふ志のうろと人なれつ 成持

まのいふさう雄子あふ志のうろと人なれつ

うろと人なれつ

猫人のうろと人なれつ

うろと人なれつ

うろと人なれつ

あふ志の雄もいふいふの使あふさうい

此の雛子城乃指場の終しとてついでにけり
源氏まじし并にともなひ

○雲雀 ま乃中よりうそを雀の床ゆいひり

移りいひり 東秋のうめをかくてうす
とて移りてうめをかく

そ花いま乃中よりうそを雀の床ゆいひり

とて移りいひり 東秋のうめをかくてうす
とて移りてうめをかく

なまのうすなり 東秋のうめをかくてうす
とて移りてうめをかく

みとの果まき 東秋のうめをかくてうす
とて移りてうめをかく

いれをいれ 東秋のうめをかくてうす
とて移りてうめをかく

くらをくら 東秋のうめをかくてうす
とて移りてうめをかく

もを 東秋のうめをかくてうす
とて移りてうめをかく

移り 東秋のうめをかくてうす
とて移りてうめをかく

まの 東秋のうめをかくてうす
とて移りてうめをかく

いれ 東秋のうめをかくてうす
とて移りてうめをかく

を 東秋のうめをかくてうす
とて移りてうめをかく

な 東秋のうめをかくてうす
とて移りてうめをかく

ま 東秋のうめをかくてうす
とて移りてうめをかく

の 東秋のうめをかくてうす
とて移りてうめをかく

う 東秋のうめをかくてうす
とて移りてうめをかく

す 東秋のうめをかくてうす
とて移りてうめをかく

を 東秋のうめをかくてうす
とて移りてうめをかく

な 東秋のうめをかくてうす
とて移りてうめをかく

ま 東秋のうめをかくてうす
とて移りてうめをかく

の 東秋のうめをかくてうす
とて移りてうめをかく

まふむのゑ乃下凡ふれむつる夕ひ任意改

ま乃ゑ乃下凡にふまてゐる夕むる

のり判ふれてつるひすこーふうり

ふこれとゆふゑ乃下凡ふるゑる

るくえんゑ氣のりてみれといふ

右三首六百番の并合乃す倭成て判也

。栗子島

人しゆれふ色ふいこのまふふと

るゑ乃とてふこゑも耳のふ

るふいふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふ

てふ人ふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふ

川流ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふ

風鳥ふふふふふふふふふ

傳ふふふふふふふふふふ

ちふふふふふふふふふふ

をふふふふふふふふふふ

すれどもとみまづほしとし

又妹の如きこにつむのまじりむ

春乃物ふすれつとて初を望まふとて一花は
分る

まのゆゑ華つとまきてわんあう

菜一食法

八
 心を養ふはむのむかししよさる人なりとゆれ

やに菫乃どのを呼んで何と云ふ

至て祿を人々に与ふと爲めんとす

電報のふふひの糸は地獄の糸は空を走る

ふひ原は秋葉をつむ

新大正
ありいそりつるいふひの衆いふまふし

いふと人にとめはせられうも花はと
多

もろに人ときらてみまはむとてうきよ

まゝれをつゝておゝると
物ほいゝね

并にこれよりいふ人をつとめて

われをゆひ　ふのゑのれを　ふのれを　笑ふ

蓮より泥を乃庭まであれと

物之乃然也

此種之字樣。乃不美。他之字樣。亦不美。
後加

紫の袖より換中の菱おれと袖一つと

久しうしうにたまは神の袖也万葉に
三神した左太神もかきけきみみ横
世の上踊回乃必下玉田横踊も

呪のくわ泉虫のり

^{雄子く}山崎のいづのきつふきふ先すつうるをいふ^{歌季}

きめきふの歌もろのいし我ゆはきふと
めゆとふしこつちあきさといふう月

○二月三日 桃花

かひこ日ハ曲あれ萬といふ事ありのり
こいふもこれさすあつたもいふうた

あやうあをうてまれけりあひぬて
よふも益となあてふいもきとく
きぬの奥といひれもきあなれう
おしおゆやつろしはあは昔ハつらとけ
つとさといふきあしねとすれはあは海に
ゆはハ天龍よるもいしけけりもれも
あうふてきしうつくあつた又うら
せりさうといふ桃のうらまはといふ仙人
の持てさうといふ桃のうらまはといふ
うら桃のうらまはといふのうらまはといふ

こふもなほつと桃のこころもさへもつしはけり春

こころもなほつと桃のこころもさへもつしはけり春

こころもなほつと桃のこころもさへもつしはけり春

こころもなほつと桃のこころもさへもつしはけり春

こころもなほつと桃のこころもさへもつしはけり春

こころもなほつと桃のこころもさへもつしはけり春

こころもなほつと桃のこころもさへもつしはけり春

こころもなほつと桃のこころもさへもつしはけり春

こころもなほつと桃のこころもさへもつしはけり春

こころもなほつと桃のこころもさへもつしはけり春

こころもなほつと桃のこころもさへもつしはけり春

こころもなほつと桃のこころもさへもつしはけり春

こころもなほつと桃のこころもさへもつしはけり春

こころもなほつと桃のこころもさへもつしはけり春

こころもなほつと桃のこころもさへもつしはけり春

こころもなほつと桃のこころもさへもつしはけり春

こころもなほつと桃のこころもさへもつしはけり春

こころもなほつと桃のこころもさへもつしはけり春

こころもなほつと桃のこころもさへもつしはけり春

空乃前よりなれきりたる雨詩をほく
依り人ハ空をうて海を乃甘し詩を化
めさる人を空にさすふれとい詩も石
子所なりとてさくきふれと詩を能け
人ハいさふ詩とて詩をほくさる人ハ
空のをやわつれとてさくきふれと詩
わ乃始と監觴とてさくきふれと詩
涙江乃始とて涙ふより出る河よと涙
少ありて
監觴を回しうて陰波万頃舟より河
らとハ海へつれ 山谷詩云涙江始監
觴入楚即云座とつれ

夜雨偷濕曾波之暇新媚曉風緩吹不言之口

先笑記河云也 其れあのみりつり

せハ枕むれつりさるかすこひさる曾

波と云養人の暇乃媚よにらとて笑風緩

く吹てれいさるらむひさてつれ

さるに枕むれひさるさる也

○杜若良善 うつさ 河邊 やほり 二河

いさかふ 浪上卿

海邊浪よりなれきりたる笑花よりみれつり

とふ名はつきて垣より出てふれりされし
みとるものへは昔のあはれをいへる
なしむはよりいへるじつものことむ
ぬやすうつむゆきものせも八橋より出て
をけしとあつたものをいへる

いそめー昔れやのわづらふとみくらうとをかくておくれ
いそめてちうとー昔れ者の若にううとこれ
とかつとこゝろ又からかえんあうりさちや
花乃垣りーとてふあやしきハム道にあう
と名の垣よもせうげふハ後撰友部子
いそとらま乃ゆれと夜にいしらと咲むらん
なりとれと歌よハまふちや

義方朝臣

衣さうしほしきうつまふとふくふわなほと
 かう衣さふれしうほまれぬよほしきけく
 とほとふとしうくときうたひな
 いよくあうきうくと欲ふたううし
 けきううつとふまふとふ乃とふ
 とふてけうふと冬河回八橋とふあり
 停機物沈うとくくんゆ

○ 散花
あらのむ
散花
浪子に
散う
葉

花のうらやまはあやう

枝葉

ふいり歌

多松浦 翠 布勢浦 日 春日山 大和 今来星 能作

佐云岸 持津

花のうらやまはあやうてえびしと咲くんとし
松のうらやまは常盤のみやまをまどあす
しと又ば花のうらやまはあやうとあす
ともふじしと八重の葉をまの末夏乃物
ありあけのうらやまはあやうとあす
されし時のうらやまはあやう

紫乃うらやまはあやうとあす

花のうらやまはあやうとあす
わろしと花のうらやまはあやうとあす
しと花のうらやまはあやうとあす
しと花のうらやまはあやうとあす

花のうらやまはあやうとあす 幸平

花のうらやまはあやうとあす
と花のうらやまはあやうとあす
あつと花のうらやまはあやうとあす
花のうらやまはあやうとあす
やうと花のうらやまはあやうとあす

幽玄也并いづるはふあつ事なり

我をよしむる友と立ゆりて人の人なり朽恒

宿に笑ふこと立ゆりて人の人なり朽恒

夜並にそしるはふあつ事なり

常葉の松乃名ふそよあけの松乃名ふそよあけ

常葉の松乃名ふそよあけの松乃名ふそよあけ

春日すなはちそよあけの松乃名ふそよあけ

春日すなはちそよあけの松乃名ふそよあけ

春日すなはちそよあけの松乃名ふそよあけ

春日すなはちそよあけの松乃名ふそよあけ

春日すなはちそよあけの松乃名ふそよあけ

春日すなはちそよあけの松乃名ふそよあけ

春日すなはちそよあけの松乃名ふそよあけ

春日すなはちそよあけの松乃名ふそよあけ

春日すなはちそよあけの松乃名ふそよあけ

春日すなはちそよあけの松乃名ふそよあけ

春日すなはちそよあけの松乃名ふそよあけ

春日すなはちそよあけの松乃名ふそよあけ

春日すなはちそよあけの松乃名ふそよあけ

春日すなはちそよあけの松乃名ふそよあけ

えと勢大ぬみしとの神の音とせしう
めて年少小娘を乃文とせしう
しうとせしうとせしうとせしう
しうとせしうとせしうとせしう
て登乃次とせしうとせしう
えいせいのな機の上春とせしう
うとせしうとせしうとせしう
のしとせしうとせしうとせしう
ねりしとせしうとせしうとせしう

我が家よりぬみしとの神の音とせしう
えいせいのな機の上春とせしう
うとせしうとせしうとせしう
のしとせしうとせしうとせしう
ねりしとせしうとせしうとせしう
て登乃次とせしうとせしう
えいせいのな機の上春とせしう
うとせしうとせしうとせしう
のしとせしうとせしうとせしう
ねりしとせしうとせしうとせしう

新くふてわつた井は祿是を井乃る

ふまを思ひやふ祿はとれふきとていふ

ハ市井は井乃るはつてわつた井乃る

とまふはつた井乃るはつてわつた井乃る

井乃るはつた井乃るはつてわつた井乃る

井乃るはつた井乃るはつてわつた井乃る

井乃るはつた井乃るはつてわつた井乃る

井乃るはつた井乃るはつてわつた井乃る

井乃るはつた井乃るはつてわつた井乃る

井乃るはつた井乃るはつてわつた井乃る

井乃るはつた井乃るはつてわつた井乃る

井乃るはつた井乃るはつてわつた井乃る

井乃るはつた井乃るはつてわつた井乃る

井乃るはつた井乃るはつてわつた井乃る

井乃るはつた井乃るはつてわつた井乃る

井乃るはつた井乃るはつてわつた井乃る

井乃るはつた井乃るはつてわつた井乃る

井乃るはつた井乃るはつてわつた井乃る

井乃るはつた井乃るはつてわつた井乃る

雲の根指乃夜に雲の言う神乃名沙は
有るれうと

懐望慈恩二月盡紫雲花散落閑白

大寺慈恩寺友む乃名は懐望と云ふ
じし慈恩寺はま言く久しき
るれ花散るうとて鳥を鳴う也
しひうと

紫雲花散落花色相親友花乃所の庭に

里るをれと云くみゆと云う

○歎冬やふ山吹井ての山吹山吹うれ川山吹

神糸倫の川日 小橋うたの山吹

常は山吹花と云く山吹花と云く
まはえといふ山吹花と云く
の山吹花と云く山吹花と云く
ふうと云く山吹花と云く
の山吹花と云く山吹花と云く
なむと云く山吹花と云く
ふうと云く山吹花と云く

今糸倫が山吹乃小橋うたの山吹
昔は山吹乃今も山吹乃小橋うたの山吹

花乃咲匂やんとしう楊小つう崎と城名下し
楊崎ハ河内あり皇子尊乃を王とせり
まゐる匂やみもつうくも香くあつていふれども
雨は花よりゆいてあふに香くいふれの花乃
あつて花と梨花一枝春華あつてつうのついで
花の井よりいふれつういふれ花乃をいふれとす楊崎が
花の井よりいふれつういふれ花乃をいふれとす
れはあつていふれつういふれつういふれとす
あつていふれつういふれつういふれとす
井よりいふれつういふれ花乃をいふれとす

つういふれつういふれつういふれつういふれ
とすいふれつういふれつういふれつういふれ
花乃をいふれつういふれつういふれつういふれ
とすいふれつういふれつういふれつういふれ
とすいふれつういふれつういふれつういふれ

又流法先云盛と云ふとて夢と云ふ事とある中いふ

花乃咲匂やんとしう楊小つう崎と城名下し
楊崎ハ河内あり皇子尊乃を王とせり
まゐる匂やみもつうくも香くあつていふれども
雨は花よりゆいてあふに香くいふれの花乃
あつて花と梨花一枝春華あつてつうのついで
花の井よりいふれつういふれ花乃をいふれとす
花の井よりいふれつういふれ花乃をいふれとす
れはあつていふれつういふれつういふれとす
あつていふれつういふれつういふれとす
井よりいふれつういふれ花乃をいふれとす

嘘の神の川をさくといふ花もいとや美人と

ふ花笑ふう嘘の井をれ里人しやうかゆ基後

ふ花のむけに嘘の井の里人をかきしめし

機らるる言ゆくやむひちとあらふふ花も後

機らるる言れ言ひやむひちとあらふふ花も

ふ花の笑ふ

一きふらふ白いさくさくさくさくさくさくさく長後

さく一きふらふ白いさくさくさくさくさくさく

嘘のむけにやまらるるさくさくさくさくさく

さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく後

ふ花乃花の前さくさくさくさくさくさく

川一弱さくさくさくさくさくさく

ふ花乃花のわかれさくさくさくさくさくさく業平

ふ花のむけにやまらるるさくさくさくさく

わらんさくさくさくさくさくさくさくさく

さくさくさくさくさくさくさくさくさく

さくさくさくさくさくさくさくさくさく

けさくさくさくさくさくさくさくさく

ふ花乃花のわかれさくさくさくさくさくさく業平

ふ花乃花のわかれさくさくさくさくさくさく

玉の井ハ山城又近江に同みあり

七

却人^七まももるん城のつら井戸のふれ^{櫓云衛女}のむ

るこ人ふてもなれ城のつら井戸のふれ

のむもも^變也^{一系北東の院西角也井戸殿と号ス}

漢衣

白よりま^{漢衣}い言ひふれ乃むも^{定七}花乃中まつ

ふれ乃咲白よりま^{漢衣}い言ひふれ乃中まつ

つとき花よてあふもふくまを^{飛成}行りあふ

新讀衣

ふり川中^{飛成}もまれりあふもふりつらふれ乃む

云野河も中まの言ひあかけふふれ乃花

のつらめもつら^{飛成}の月あふりつらふれ乃花

點着此^{飛成}黃天有意款冬誤錠芳春風

梅欄らうもつら^{飛成}乃花もつらなりてのむ

むむ^{飛成}つら乃天乃わりも^{飛成}款冬む

はるもつら^{飛成}も^{飛成}昨^{飛成}黄^{飛成}乃^{飛成}款冬^{飛成}言^{飛成}ま

の凡^{飛成}は^{飛成}い^{飛成}も^{飛成}も^{飛成}誤字を^{飛成}款冬^{飛成}花^{飛成}と^{飛成}云^{飛成}を

かま^{飛成}も^{飛成}路^{飛成}乃^{飛成}花^{飛成}と^{飛成}つら^{飛成}と^{飛成}日^{飛成}か^{飛成}も^{飛成}誤^{飛成}て^{飛成}ふ^{飛成}咲

と^{飛成}款^{飛成}を^{飛成}む^{飛成}とい^{飛成}ま^{飛成}も^{飛成}誤^{飛成}て^{飛成}院^{飛成}とい^{飛成}り^{飛成}又^{飛成}款

冬^{飛成}い^{飛成}冬^{飛成}と^{飛成}つら^{飛成}と^{飛成}より^{飛成}そ^{飛成}う^{飛成}へ^{飛成}も^{飛成}ま^{飛成}も^{飛成}ま

む^{飛成}の^{飛成}そ^{飛成}も^{飛成}誤^{飛成}とい^{飛成}り^{飛成}之^{飛成}侍^{飛成}侍^{飛成}僧^{飛成}房^{飛成}

逢^{飛成}若^{飛成}款^{飛成}冬^{飛成}花^{飛成}出^{飛成}寺^{飛成}以^{飛成}乃^{飛成}日^{飛成}已^{飛成}斜^{飛成}と^{飛成}つら

山吹より路のむきよな原より十二月十日

わうとふし御座は言ふれ凡そ院とて

^左山吹より路のむきよな原より十二月十日

井よりをるのをけしはうし黒しや入吹と

吹のわれしとあり

ふ吹乃のうきやえとてふきよな原より十二月十日

ふ吹乃のうきやえとてふきよな原より十二月十日

ふ吹乃のうきやえとてふきよな原より十二月十日

^左七きやるむきやえとてふ吹乃のうきやえとてふきよな原より十二月十日

こしきよな原のむきよな原より十二月十日

わてとてふきよな原のむきよな原より十二月十日

ふ吹乃のうきやえとてふきよな原より十二月十日

ふ吹乃のうきやえとてふきよな原より十二月十日

わてとてふきよな原のむきよな原より十二月十日

^左七きやるむきやえとてふ吹乃のうきやえとてふきよな原より十二月十日

ふ吹乃のうきやえとてふきよな原より十二月十日

ふ吹乃のうきやえとてふきよな原より十二月十日

ふ吹乃のうきやえとてふきよな原より十二月十日

ふ吹乃のうきやえとてふきよな原より十二月十日

河津

かゝる川にまれば田地は谷川并てまゐるに
八重よかたのしと云ふるに隠れぬの介を
よきと但後撰よあつたことあり河津新夕
よあつたことあり義忠弘徽殿女御并今昔集
物ふ鳴るううあつたこと非云かゝる川にまれば
鳴物しと云ふるううすこと云々万葉集云々
あつたことあり新夕よ鳴るうう今昔集
花よ鳴るあつたこと河津のううと云ふ
いふうういふうういふうう新夕よあつたこと
るとわうあつたこといふうういふうう

いづれも新夕よあつたこといふまゝに万葉集よ

あつたこと河津の新夕よいづれもあつたこと

^{初陽毎釣来不相還本栖}
初まのあつたこといふうういふううあつたこと

河津のあつたこといふうういふううあつたこと

^{良選}
あつたこといふうういふううあつたこと

あつたこといふうういふううあつたこと

あつたこといふうういふううあつたこと

^万
あつたこといふうういふううあつたこと

あつたこといふうういふううあつたこと

^{新古今}
あつたこといふうういふううあつたこと

まはわいてはさふゆの煙の夕暮り鳴
みみ教とふれわくこわれくはる面
白くといふて流るゝ出てはとうとうあう憐
うは我やもて煙ふふの下までりるゝ思ふ^{業平}うく
い^平女のもつゝふていふあはれうう
てのうとてて我うゆふ人いふわうと
さうあれたふていふううとふうと業平
まててふう^平し煙いふはうう^平けと悉
くの煙のいふやういふやういふいふ
はう煙るあふういふ煙となくとと

そのうとてうてうてのういふうとて我と
もういふも一回うういふいふ人あう乃
トふいふいふ^平難儀なる^平業平我
と煙ういふていふ其あふ^平なり忘
乃^平あれと煙は有てうとてあう

○^{業平}躑躅

あは笑とてあはれいふ^平常業れいふう
いふいふいふあふいふあふとて
いふいふいふあふいふあふいふ
あふいふいふあふいふあふいふ
あふいふいふあふいふあふいふ

八

かゝるつゝといふはへるし
うくよきとあらうとはいふは
ふつとふつといふはへるし
ふつとふつといふはへるし
ふつとふつといふはへるし
ふつとふつといふはへるし
ふつとふつといふはへるし
ふつとふつといふはへるし
ふつとふつといふはへるし
ふつとふつといふはへるし

かゝるつゝといふはへるし

杜鵑花すなわつちれむし杜鵑花すなわ
ちれむし杜鵑花すなわちれむし
杜鵑花すなわちれむし杜鵑花すな
わちれむし杜鵑花すなわちれむし
杜鵑花すなわちれむし杜鵑花すな
わちれむし杜鵑花すなわちれむし
杜鵑花すなわちれむし杜鵑花すな
わちれむし杜鵑花すなわちれむし
杜鵑花すなわちれむし杜鵑花すな
わちれむし杜鵑花すなわちれむし

入目すなわちれむし杜鵑花すなわ
ちれむし杜鵑花すなわちれむし
杜鵑花すなわちれむし杜鵑花すな
わちれむし杜鵑花すなわちれむし
杜鵑花すなわちれむし杜鵑花すな
わちれむし杜鵑花すなわちれむし
杜鵑花すなわちれむし杜鵑花すな
わちれむし杜鵑花すなわちれむし
杜鵑花すなわちれむし杜鵑花すな
わちれむし杜鵑花すなわちれむし

ふつとふつといふはへるし

ふつにさる月見のめもさるうー花とて

くすまいさくめさるうー(兼河春

目少しつれな晩まの満のつこ

兼^右戸をらるや日敷のめさるま言からんれ ^{兼河}

葉戸をらるや日敷のめさるめさるま

の言うううううう

わさうへん^川もれ兼河なうふ誰へとらんまれ ^{兼河}

ま言てめさるううううれ兼河なうふ

ま^右のこもさるううううま^{新恒}ま^{新恒}もれ兼河なう ^{新恒}

かふうううううううううううううう

めさるなうううれ兼河さるううう兼河

さるううううううううううのめさるう

にううううう

花^右みさるうううううううううう ^{兼河}

むいこくもさるうううううううう

さうううううううううううううう

はるうううううううううううう

うううううううううう ^{兼河}

わねのまろ

人更少時須惜年不常春酒莫空

人うにうつくてめい事おれし時のうつ事と
そいひい事し年つひよまよてつひひ
むまハ内とをしらるてあうひらする
ふ事しや書まのゆへ

苗^{ハルニ}春^{ハルニ}去^{ハルニ}不^{ハルニ}留^{ハルニ}去^{ハルニ}故^テ人^{ハルニ}寐^{ハルニ}寔^{ハルニ}白^{ハルニ}去^{ハルニ}と人^{ハルニ}毎^{ハルニ}去^{ハルニ}
 てらひりふとゆと去のゆりつる泣を
 人の心は寐寔とさうと去とさうと

竹院^ニ石^ニ閑^ニ消^ニ水^ニ日^ニ花^ニ亭^ニ我^ニ醉^ニ送^ニ殘^ニ春^ニ 白

美のふれも悪も竹枕は御座わりてあり
うよ長ふ日もをくは流転亭よりわきへ
いて云をにきくわたり

苗春不用開城固花落隨風鳥入雲
五列

雲をたゞとしてとむるは國のこゝれとて
 昔のちりたる花は風うきこひ當るを
 ふりぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

春宵一尅直千金
三月盡
人妻と云ひて
少くも
の長一別
あはれ
と云

の事むい中にいゝ人よつゝ子入るゝあ

源氏は更衣とて八右女御をよめたりとて

后のいふ所の河内御衣と改め流しとて衣
 のいふいふ所は河内御衣と改め流しとて衣
 むとて衣衣の事兼和天皇よりとて衣

文政^ハ是^ニ命婦^ハ益^ニ女苑人^ハ六^ニ女御^ハ后よりさるを經^ス

宵壁燈殘經宿燭
閑箱衣帶隔年香

燈より心も灯ハすも言れぬもの

第百三十一回

方々花八日月一日物乃心美夢此也

といふ卯月一日は太内乃北の坪より

柳とて物とて至てすれをあけし親

ある

卯花 卯花月夜 川子ひうつ

卯花心散中
 とろ細る山海
 玉川の里
 荷津

夜々清夜電しとま之垣祿分家月夜

あゝ玉川の雲は八浪より久しふ川の堰は

さうぞう布をにうめいふせふほをうむう

つれふ雲を卯花のたふ重く人目とては

あはれむ八重や卯たふもさう後撰よ

白くふくやむるやむるやむるやむるのふくやむる
月よにふくやむるやむるのふくやむるのふくやむる
のふくやむるのふくやむる

卯むのふくやむるのふくやむるのふくやむるのふくやむる
いふくやむるのふくやむるのふくやむるのふくやむる
ふくやむるのふくやむるのふくやむるのふくやむる

卯むのふくやむるのふくやむるのふくやむるのふくやむる
宿のふくやむるのふくやむるのふくやむるのふくやむる
ふくやむるのふくやむるのふくやむるのふくやむる
のふくやむるのふくやむるのふくやむるのふくやむる

時ふくやむるのふくやむるのふくやむるのふくやむる
卯むのふくやむるのふくやむるのふくやむるのふくやむる
卯むのふくやむるのふくやむるのふくやむるのふくやむる
白くふくやむるのふくやむるのふくやむるのふくやむる

卯むのふくやむるのふくやむるのふくやむるのふくやむる
卯むのふくやむるのふくやむるのふくやむるのふくやむる
卯むのふくやむるのふくやむるのふくやむるのふくやむる
卯むのふくやむるのふくやむるのふくやむるのふくやむる

あつときあつとき目のまの事とてあつて

おむの笑のりあ白あ乃浪りてゆふ垣子とてみ

おむの笑のりあ白あ乃浪りてゆふ垣根とてゆ

ふし浪りて垣より幸いあなれと浪りてゆ

ふし浪りて垣より幸いあなれと浪りてゆ

おむのりあ白あ乃浪り

おむのりあ白あ乃浪りてゆふ垣の歌うとみ

おむのりあ白あ乃浪りてゆふ垣の歌うとみ

こゆとてし

おむのりあ白あ乃浪りてゆふ垣の歌うとみ

おむのりあ白あ乃浪りてゆふ垣の歌うとみ

おむのりあ白あ乃浪りてゆふ垣の歌うとみ

こゆとてし

おむのりあ白あ乃浪りてゆふ垣の歌うとみ

おむのりあ白あ乃浪りてゆふ垣の歌うとみ

こゆとてし

おむのりあ白あ乃浪りてゆふ垣の歌うとみ

おむのりあ白あ乃浪りてゆふ垣の歌うとみ

こゆとてし

おむのりあ白あ乃浪りてゆふ垣の歌うとみ

おむのりあ白あ乃浪りてゆふ垣の歌うとみ

おむのりあ白あ乃浪りてゆふ垣の歌うとみ

おむのりあ白あ乃浪りてゆふ垣の歌うとみ

なりなりいふらん
 一と云ふわく
 一たりなりふら
 めまの一字は
 万葉はあひみす
 のちはさうか

ちよつと多乃ちよつと多乃ちよつと多乃
 ちよつと多乃ちよつと多乃ちよつと多乃
 のみもいへば帰付多れ志よりとふ多れ
 との志なりといふ事にもいひる

種之

新讀本
夜う井よりそ承るあふり
後安

友かりめみみさ系初きてるに
 のいぬらうに伏せ床褥ぬきに
 二もせてよりぬき藤系といひて
 一かき束束とくく云つをうりし

月照平砂、夜寂、月の光砂を照すとを念ひて
のふれとありと

凡^た生^た所^た夜^た窓^た間^た外^た白^た

一てす一建ハ成ルハ意ヲ并稱スル也

早太郎をいふははるゝ所にて開
白の姫を源氏の北方にうつす御車
のうらふやうき綱代乃うらひる車
をいふはるゝにちうきける半銀随身
をしを麻子ておこしるも氷早平を馬帽
みをサヌルうらをいふしす車乃搦
すておこしるに息をぬるうら
よゆき母を志願くぬく乃車れを
う押るうらをいふしす車乃搦
志願く車乃りる一日のうらにこれ

そとりのうらをいふしす車乃りる一日のうらにこれ

源氏花

神ぬるいふしす車乃りる一日のうらにこれ

わいふしす車乃りる一日のうらにこれ

源氏花

その祭乃日女車のうらにちうきける半銀随身
をいふはるゝにちうきける半銀随身

しるまゝやとにらんをたし源内侍りと
もくも願ふもあつたつて人の
さる葵ゆへにわたりをゆへんを
四也

ふしけつをわふもあつたつて人の
もくも願ふもあつたつて人の
さる葵ゆへにわたりをゆへんを
四也

まゝにわたりをゆへんを
四也

ふしけつをわふもあつたつて人の
もくも願ふもあつたつて人の
さる葵ゆへにわたりをゆへんを
四也

しつゝてて院注と許とも名案思阿
里僧都達創注といふと院と書し
乃神と記をてり注時うらぬ六条
寺息下名のりかて賀成乃案武車わ
るいのうると志とがうかてを院注とみ
く

[illegible]

悦めり幸ひれぬに夢よ儘いふは
 母もし清いことなり歎きけり
 もまゝにてを失うべしと思へた乃とし
 こころ^わいらうしにこそと道は遠そなたて
 泣きお月のかより今ハもや師^シ馳^ハ乃
 来より思ふすこころもくも思はつた
 ふ人ゆゑ泣き母非礼なれり程なる
 い歎き泣き去る二条院より泣いて
 娘をさぐらんことをもと電報にかけん
 りにこそない泣きて思ひ出す思

なまぬかし枕をそめてくはねのねまに
又もてぬのひよき湯枕をけそあふ
寝ねまのふくまててん寝ん

いふふふふふふふふふふふふふふふ
三日も来ぬ惟光をなて孫のこゝろま
いふふふふふふふふふふふふふふふ
ていふふふふふの寝惟光をなて孫のこゝろま
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

いふふふふふふふふふふふふふふふ
もふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふ
もふふふふふふふふふふふふふふふ
もふふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふ
君ふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふ

とくしーるをばやうにて乳母といふ
またのきい活をばやうのきといふ
まんとすすむー活をばやうのきといふ
おふあふのあまをばやうのきといふ

法いそくかみろすふろすせしめ
あふのきをばやうのきといふ

郭ふふ郭ふふの国をばやうのきといふ
ふろす 活をばやうのきといふ

ふろす 活をばやうのきといふ
ふろす 活をばやうのきといふ

ふろす 活をばやうのきといふ
ふろす 活をばやうのきといふ

ふろす 活をばやうのきといふ
ふろす 活をばやうのきといふ

ふろす 活をばやうのきといふ
ふろす 活をばやうのきといふ

ふろす 活をばやうのきといふ
ふろす 活をばやうのきといふ

ふろす 活をばやうのきといふ
ふろす 活をばやうのきといふ

東をて稱えそと郭とて人傳りま

くといふにけりともいふこと

三つあるやといふ郭とていふこと

深くとく東とていふ郭とていふこと

のちのこ

一つある郭とていふ郭とていふこと

いふこといふ郭とていふ郭とていふこと

いふこといふ郭とていふ郭とていふこと

二つある郭とていふ郭とていふこと

二つある郭とていふ郭とていふこと

めをいふこと

一つある郭とていふ郭とていふこと

いふこといふ郭とていふ郭とていふこと

東の郭とていふ郭とていふこと

郭とていふ郭とていふ郭とていふこと

いふこといふ郭とていふ郭とていふこと

いふこといふ郭とていふ郭とていふこと

いふこといふ郭とていふ郭とていふこと

いふこといふ郭とていふ郭とていふこと

いふこといふ郭とていふ郭とていふこと

けしきあなりとてきつてと一々
今一とときふりやうてふ
よきとくくくく

明日香里安

有るがうのてふくすつてふり
さるがうのてふくすつてふり
さるがうのてふくすつてふり
さるがうのてふくすつてふり

有るがうのてふくすつてふり
さるがうのてふくすつてふり
さるがうのてふくすつてふり
さるがうのてふくすつてふり

有るがうのてふくすつてふり
さるがうのてふくすつてふり
さるがうのてふくすつてふり
さるがうのてふくすつてふり

有るがうのてふくすつてふり
さるがうのてふくすつてふり
さるがうのてふくすつてふり
さるがうのてふくすつてふり

卯むね垣根

運后

卯むねの垣根はあけぬもいづれもあけぬ月
極乃陰はるもいづれも卯むねの垣根は
は定ちよして月の極乃葉ふなをやせ
淡く月の極乃陰はるは月小くは
るし

卯むね

佐加

卯むねの垣根はあけぬもいづれもあけぬ月
極乃陰はるもいづれも卯むねの垣根は
は定ちよして月の極乃葉ふなをやせ
淡く月の極乃陰はるは月小くは
るし

卯むね

佐加

卯むねの垣根はあけぬもいづれもあけぬ月
極乃陰はるもいづれも卯むねの垣根は
は定ちよして月の極乃葉ふなをやせ
淡く月の極乃陰はるは月小くは
るし

雪の童子の伝はる常のうきさうじく
て命よりさうさ事もあやうき
の偈のはれとてしるふよき
えいとのふりてあきさうじく
ゆり末飽郭とてしるふ

えいとのふりてあきさうじく
あきさうじく
くえいさうじく
くえいさうじく
くえいさうじく
くえいさうじく
くえいさうじく
くえいさうじく
くえいさうじく
くえいさうじく

きく

る船

えいとのふりてあきさうじく
あきさうじく
くえいさうじく
くえいさうじく
くえいさうじく
くえいさうじく
くえいさうじく
くえいさうじく
くえいさうじく
くえいさうじく

信史山與川

郭公の初交を要ふの弁を要す

有為の底ハ是と云ふにハ、
此の如く云ふは、
定数

雨より建ちてふよりほかにあなれ

わんこふうわんこふうわんこふう

うきもの独りごとを女の衣をひ

[illegible]

とふもよてものゝ名と名家が多なれしは

中々其の如くして鳴のそりてう

有
我
を
ら
よ
う
て
る
略
う
心
を
と
り
あ
ら
う
さ
す
に
あ

け多にけとふすゝ鳴多し実名乃中一と

○西久保子氏より中津より鄭公へ書

孝行記

つとむに秘して胃を養ふなりをけり

ふりすゝ多といふをりなほてゐれ思

ハシラヒ

踏
 或
 本
 ヤ
 う
 う
 ら
 ん
 短
 札
 定
 め
 る
 方
 法
 守

くよのふ郭とやうらうらやうらん

源氏物語のやうに
短ふれども
なほ

ふくしうはむにせんとわやくんを

一、水とて云河をまきくをれりあ

国立公文書館
National Archives of Japan

其乃卷の河

万石 ^{今更} 今更 ^{月更} 月更 ^{さき} さきに

いふすこよはなれどり火とほいふよのまゝあけとん

ほくまにこいあつれ軒を月更一を

くまひなつてはなれはなれやまれのあらま

くまひなつてはなれはなれやまれのあらま

いふすこよはなれどり火とほいふよのまゝあけとん

ほくまにこいあつれ軒を月更一を

くまひなつてはなれはなれやまれのあらま

いふすこよはなれどり火とほいふよのまゝあけとん

ほくまにこいあつれ軒を月更一を

万石 ^{今更} 今更 ^{月更} 月更 ^{さき} さきに

いふすこよはなれどり火とほいふよのまゝあけとん

ほくまにこいあつれ軒を月更一を

くまひなつてはなれはなれやまれのあらま

いふすこよはなれどり火とほいふよのまゝあけとん

ほくまにこいあつれ軒を月更一を

月よらゝしやにあらぬ月いやはら

やはら 御中より

ふよら 素性 此の時多し思ひなりを昔より

少きおれぬにうらゝてゐる時多

うゝ思ひなりあるにゝゐるにこれより

却い奈ま却しふよらぬといふ枕河

葛川のふといふことゝ日かた十柄

びり賤女川のけりりゝ布を洗ふ

よらゝしひらりぬるれゝるまよ

ゝ外のふらぬゝふゝれぬ後ゝけ

賤女の布よらゝするは布ぬゝと

國布ぬ明津も

時多し思ひけいゝれゝるを思ひ

時多し思ひけいゝれゝるを思ひ

思ひけいゝれゝるを思ひ

まは不如帰ゝ実名といふ

やゝてゝ時多しゝれ回ゝゝ島

いゝふれゝゝいゝぬ我ゝゝゝ

うゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

まての田もいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい

○法葉

葉をひきよめていすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい

りていすゑに催馬樂妹門よりい

たよりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい

つちの梢乃友よりいすゑに催馬樂妹門よりい

く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい

○葛蒲

わやち草よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい
く妹門よりいすゑに催馬樂妹門よりい

袂より脱ぎても 大徳院のかくれ秘傳

ほくまに迎に 安積 あきほ 陸奥

なつ津の地 孫富浦僻事し彼國云富浦海と云
八月五日三書也云有後頼抄

人これぬまふかきも人乃ぬまふにけり
らよわれは袂は福はうらもわれぬまの
名いわれぬまもなれ年ハむ徳もま
したるうてきき可きまやいぬま
こもぬまはぬまもぬまもぬまも
あふらうはぬまもぬまもぬまも
わかれぬまもぬまもぬまもぬまも

らすもぬまもぬまもぬまもぬまも
くらぬまもぬまもぬまもぬまも
お帰るうきもぬまもぬまもぬまも
通俊の罪なり

は従^森の座よりぬまもぬまもぬまもぬまも
就人の座よりぬまもぬまもぬまもぬまも
まうまうてぬまもぬまもぬまもぬまも

わやぬまもぬまもぬまもぬまもぬまも
わやぬまもぬまもぬまもぬまもぬまも
従よりぬまもぬまもぬまもぬまもぬまも

めをもちのいよやみ節會のいって今日宴
を辭にまほし今ハ汝くたれよやと
まいたた迎來左に共來のやちをもち
のやめ御こゝとて南殿よかきものこ

井ノ

村まへのわかれつゝまはし移まはるゝをいやる所

女房

弘濟村のいふことしやめつゝまはし移ま
とてけのふらに川やろまゝとて月又
つゝまはし移まはるゝをいやる所
らとまはるゝ太をのふ場乃にけりよハ
わすれぬまはし移まはるゝをいやる所
見えしれゝまはるゝをいやる所
やめつゝまはし移まはるゝをいやる所
一より淡命まはるゝをいやる所
まはるゝをいやる所

云意故園任脚行

有み日はくまをいやる所

まはるゝをいやる所
まはるゝをいやる所
まはるゝをいやる所
まはるゝをいやる所
まはるゝをいやる所
まはるゝをいやる所
まはるゝをいやる所
まはるゝをいやる所
まはるゝをいやる所
まはるゝをいやる所

照村すゝまよの原の下居れうさり志の
 りらすらう袖うくすくぬれこなり
 稻袋束よふらよりらすをぬる事なる
 れといふうきははにわひさるゆとらう
 すろのうひなりまよの原よふら
 ともとくもろきひらとら

いづれもゆくは嵐よこしと大いそれ没るの星（龍季）
いづれやにいでまの嵐よりすく大いそ
るの星としてあらとありといふ候ふとき
せくらにいざんやまあり

有ふ下やにこそは鹿乃辛のふり
多

さ月ふあけらふ下やまにさゆと火い鹿と
まのあふくはてわるとあり

源ありしれど、
 新のうれを二よりや、
 廉はるる 仲正

津水より乃大に孰うると二とりとる麻

ハルカ

とりすほふれ松より流きてゆらにきくよきなり
照村乃かくの松もはるくゆらよみり
すよとて川やもく下向乃やまなり

鵜河
 子
 長川
 鵜川
 町
 里
 火
 たるじ

極川 大井川 日 宇治川 日

交ふつたものゝ中へ 鶴舟よりて 鶴に
ふすものゝ中へ 大井川へ 鶴川へ といふより
独り舟にまゐりて 棹をひと一人をれ
かりとよりて 舟のいへは 座ありて
舟と鶴とを 舟のいへに 舟をれ
くみれ 座よりて 舟のいへに 舟をれ
鶴の 帆よりたれ 舟のいへに 舟をれ
くれらひて 舟のいへに 舟をれ
れられし 舟のいへに 舟をれ

これより舟のいへに 舟をれ

八重は 真多 鶴 舟のいへに 舟をれ

鶴川より 舟のいへに 舟をれ
暗長より 舟のいへに 舟をれ

大井川より 舟のいへに 舟をれ

大井川より 舟のいへに 舟をれ
いへに 舟のいへに 舟をれ

大井川より 舟のいへに 舟をれ
いへに 舟のいへに 舟をれ

いへに 舟のいへに 舟をれ

くも火れり乳をまけゆきかたしとて
ちいね細のそなわをうさひなる轆子
をくむさういそくいふゆきしを
と云火の乳のりかき火れ乳火のあは
え事といふ

○宵雨といふれあきさる 谷ひく 山川

流つを 難波江 橋 渡りやう密 ちれ牧
宵ぬる比ハ湖も難波江に池も川ともま
さとして浅瀬に倒しうけり乃きよをま
うゆいけきとくいー産かとも

未葉をこし河をい柳も庭をのりし
浮草も祢を流てり未をすのれお井
のあもじまぬにこり若れおけは
さうゆいかりを垣をねくさるあ
わすもじな一く日殺をすこし
いすらくとあけをしまふれ
おしとむいーハきり卵をくハ
にみ月のぬり万葉をまとい卵を
そーといふ

五推
宵ぬる乃ハ牧のこしあきさるいし
お

東にふるふるに河に万葉のしにもえ
ついでたるしづりけ川社乃事三林
良枝くくりにくはれなる

ふ川の東に海に流るるつはつゝなるありあはれ
ありあはれの比にふ川のありまゝして是れと海
らとる煙もいつく急ういなりとも

とみれみゝ海にれとるあはれなる葉末く煙を
ぬよ水海よりてこゑの地を葉末く葉末く
煙乃ちとく昆陽池ハ津田く行基并
けは池と十二塔流るる昆陽寺ハ立石

也奉き葉師より

有ありあはれもさうなるをさうと葉末く

ありあはれもさうなるをさうと葉末く
まゝにれとるさうなるをさうと葉末く
が葉末くさうなるをさうと葉末く

けえぬあはれもさうなるをさうと葉末く
ありあはれもさうなるをさうと葉末く

玉汗のなり人のこころは流れて程なりあはれ
松人のこころは流れて程なりあはれ

るいぬまきりてあまらうもなす
のよてこしほてはてはすまじほしあま
といふらけきねけし

のち咲ゆふは陰あちてみゆあまらう風とあま
標咲ゆふは陰あちてみゆあまらう
るの咲と目の中は事し八重は 郭公
あふられはうけくは習しんそう式抄は
ふれまのねとこしこしとはははあまら
む咲はまらふまらこいびうのこし
標のむれうと紫う咲とよてははあま
らのこしあう又こし草し標乃美ふと
ふといふ

○ 盧橘 花しらふか

花橘乃白いは昔をさひくは花軒の
さのよもやてうさうさうさうさう人乃
神の音はゆふ白いとぬて人乃さう
さうい郭公のやうさうさうさうさう
ハまの万葉はさうさうさうさうさう
乃林とうさうさうさうさうさうさう
元橘ハ郭公さうさう 天平八ままた大弁

葛城王に橘の姓を冠する河内御數は
橘といふ花より葉より花より葉より
わが橘は式説より人知橘よりゆゑ音の
人の神より音しよむといふ但伊勢の橘は
宇治の使より内音のいふより女は橘にて
橘をかきつるにふりといふ

いふ橘といふ橘せり橘より橘なり橘
常世の橘のやとるに橘は橘は橘は橘
橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘
橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘

橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘
橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘
橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘
橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘
橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘
橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘
橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘
橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘

橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘
橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘
橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘
橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘
橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘
橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘
橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘
橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘は橘

使よ業平まゝく昔のいふ終に女を
あふて櫛が青くかやれをそく
よめるといふりといふ人といふて
昔乃人の神なりといふ櫛よを
じつとまをいふ人といふ櫛の香
けすのかよみん密勅し服昭櫛を
仁天皇九十年は田乃同守は常世乃
國よはつり北時の葉といふじつは櫛
を求てふといふ同守の神といふ
てけ國へいふれは昔乃人なる神乃

かしこいづとを完家て云櫛乃香なる神
よといふりいふといふ 櫛と云はるは
枕犯といふりや三體のよといふる亦
櫛と云はるは櫛の香といふるといふ
櫛乃香といふるは郭公の香といふる
櫛の香といふるは郭公の香といふる

と尋ていふといふけすの香といふる
名をいふる源氏乃香御車にて香る里
忍びたりは中川乃香といふる香といふる
らんといふる香といふる香といふる

給ふ種乃ふれとい凡あつて從者吹て
 乃あつて郭と一交けをさうき又とけあへい
 れ給とらうさうさうきぬ郭といれと
 らい一花乃垣根と女四た一郭とをさ
 と忽ちぬきとめれにらるま月ぬれはとら
 者をひくも郭とがしきつるぬ日うれよ
 ても源氏花友里卷より櫛乃香をあら
 して片きつるなるぬれ一と郭と
 よにがせく我さうをさうらうに櫛はぬら
 りひくぬ自いてとらう

樹乃花々新乃思ふ草花是るありこり
忠良

獨のむろ新 終乃われ思ふれにひふりて
若とひくふれこひてこひり

郭公花柳の香をとめておくは若れ人や恋ふ

郭公の橋の芳はとめてくさるあふるを
 橋の木凡ふにむききくはぬよぬるを後れ

櫛のふらふらのうきとくぬは名なりとしり
ふらぬゝ天智天皇筑前國那金と云此
ふ中は正に御所と云くすも後四月のま
ていていざ乃人よとぬゝ名来くゆきと

作されしむも名乗て人乃いふ事
し玉ふれ御下をみんぬと新古今集巻
やみんぬとされし名乗とてゆくハ
作み別天智天皇の御事なり
ふれ玉ふれ御の神あり花橋とてなり
つらと同守の事とてなり
河一は河乃がゆいなるはあまをともふ橋雅歌
をとよめゆいなるはあまをともふ橋
河一は河乃がゆいなるはあまをともふ橋
をとよめゆいなるはあまをともふ橋

○瞿麦うさぎに天をそとてここなり
いこいといふ名もあてなり
て妹はなるにいともし磨きつふとく
とたよるもあまをともふといひてはれ
みみふもあまをともふといひてはれ
ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい
あまをともふとてあまをともふ
八はあまをともふとてあまをともふ
に河一は河乃がゆいなるはあまをともふ

友秋ハ二升ヨシモ冬ハ一升^万と
思ふ乃自いふにうとそり女乃ふみ
けりにいふなり ね推ハ極まりぬ
しうもむ乃らふあふ一うけの親なり
ふくもむうらふねふもそり神あり
らうもふふ人しと思裁も妹もふふ
我わう床乃妹とやふと裁なり
ふもぬれも磨とふふ人しと思ふ
中常ハ友と床ふふとて床ふはら
わらぬれもふふとてうけ二入るも
ふふすれとてふふとてふふと

ふふ^右やゆれとふふ養うく夕ふふ人わとて^{素性}
わとひふふとふふとて養れ夕ふふ
大わとてふふとてふふとてふふ
家經乃長和升店小滝愛抽象故曰極
子教又契子年故曰常友とふふむら
らふふとてふふとてふふとてふふ
ふふとてふふとてふふとてふふ
乃ふふとてふふとてふふとてふふ
常友とてふふ唐極ハ友とてふふ

ね

昔は梅よりて花乃をまうとよけてうらふも
 秋乃ゆよ一もしくを笑ふるけしきハ養し
 わり友ハ友と秋部よまう同集よめなま
 ーしとててーふ妙乃にがよまけら
 やとと梅子とあつと何れとよとてーう
 とま又まを略ーうとてやといふ
 梅子ハいしとてわく白くもまててまのわ
 まてーハあつてれもまく白くもまて
 まのわあつてれもまててまのわあつて
 ち乃をすしーうとてまのわあつて

大政は能興信公

ね

常夜白く庭にうらあつてれまててー思
 常夜白く庭にうらーにうらあつて
 ーとてててててててててててて
 うすこは垣は白く梅子乃花のまをあつて
 うれくまく白くまてーこれのまーうら
 とててててててててててててて

ね

常夜白く庭にうらあつてれまててー思
 常夜白く庭にうらーにうらあつて
 ーとててててててててててててて
 うすこは垣は白く梅子乃花のまをあつて
 うれくまく白くまてーこれのまーうら
 とててててててててててててて

経衛

ふりしほりなりともわくは梅子の房は雲
もよもしいけり源氏常は女をよめ申す
いかにしし時人をたのめししそは服は
梅子ひらけりしは是のふりしとわくし
種ふぬれ女は右のやうに梅子て梅はた
をわくししはよひしけりしはふりしとわくし
そのふりしとわくしは梅子て梅子しし又
を付てかゝるししとわくしは梅子て梅子
し梅子いかにししは梅子の事なり

源氏常は女をよめ申すは梅子の事なり

かゝる西對といふは梅子て梅子ししと
わくししとわくししとわくししとわくし
し梅子いかにししは梅子の事なり
は梅子いかにししは梅子の事なり
のふりしとわくししは梅子の事なり
つとめししは梅子ししは梅子の事なり
忍ぶししは梅子ししは梅子の事なり
は梅子いかにししは梅子の事なり
は梅子いかにししは梅子の事なり

梅子いかにししは梅子の事なり
梅子いかにししは梅子の事なり

えん源氏も花よといれじしれい
ついでいもせよけしむはしれい
あれし軒乃あつていふらくみ
るふじつしれし乃きてい極子と
すきしより又ヨキ季茶と極子乃美ふ
といふりて季にむ笑ゆり

○螢火 かゝる 夏じ

かゝる力よりあつたれいし
さしあふ事とわくし思ふい

ひ田よりそしきとわく火す
茶茶よわくしとあてふ
うて茶しとわくし又音車風窓より
わくしとわくしとわくし

ほナかゝるいふもわくしとわくし
つめとかゝるいふもわくし
よてわくし我よりまたく
敦慶よりいふもわくし
いふかゝるいふもわくし
とわくしとわくしとわくし

か別あふり

源氏御中兵部へ宮西討のあつては
そつとく長あふりつとくはるるなり
言はるる救の言といひてはるるはるる
やとくはるるつとくはるるつとくはるる
つとくはるるつとくはるるつとくはるる
廟にてはるるつとくはるるつとくはるる
乃てはるるつとくはるるつとくはるる
つとくはるるつとくはるるつとくはるる

つとくはるるつとくはるるつとくはるる

つとくはるるつとくはるるつとくはるる

つとくはるるつとくはるるつとくはるる

つとくはるるつとくはるるつとくはるる

つとくはるるつとくはるるつとくはるる

つとくはるるつとくはるるつとくはるる

つとくはるるつとくはるるつとくはるる

反

わすれぬ火とてとるを我々の川邊の
當てておろすすむがれおろす火も
あまれいさ火とていひてあまを焚ぬ
いさ火とてあまをいひてあまをいひて
いさ火とてあまをいひてあまをいひて
いさ火とてあまをいひてあまをいひて
いさ火とてあまをいひてあまをいひて

反

火とてあまをいひてあまをいひて

業平

いさ火とてあまをいひてあまをいひて
いさ火とてあまをいひてあまをいひて
いさ火とてあまをいひてあまをいひて
いさ火とてあまをいひてあまをいひて
いさ火とてあまをいひてあまをいひて
いさ火とてあまをいひてあまをいひて
いさ火とてあまをいひてあまをいひて

いさ火とてあまをいひてあまをいひて
いさ火とてあまをいひてあまをいひて
いさ火とてあまをいひてあまをいひて
いさ火とてあまをいひてあまをいひて
いさ火とてあまをいひてあまをいひて
いさ火とてあまをいひてあまをいひて
いさ火とてあまをいひてあまをいひて

反

いさ火とてあまをいひてあまをいひて

物思

いさ火とてあまをいひてあまをいひて
いさ火とてあまをいひてあまをいひて
いさ火とてあまをいひてあまをいひて
いさ火とてあまをいひてあまをいひて
いさ火とてあまをいひてあまをいひて
いさ火とてあまをいひてあまをいひて
いさ火とてあまをいひてあまをいひて

反

いさ火とてあまをいひてあまをいひて

いさ火とてあまをいひてあまをいひて
いさ火とてあまをいひてあまをいひて
いさ火とてあまをいひてあまをいひて
いさ火とてあまをいひてあまをいひて
いさ火とてあまをいひてあまをいひて
いさ火とてあまをいひてあまをいひて
いさ火とてあまをいひてあまをいひて

首しと二首しとを讀む今集より
さうなるるを讀む費之業に今序より
まじの次よりほるにけしけれうを玉葉
集より讀むしけれうにけしけれうを
武殿上人の次より讀むしけれうに
よほりてめじしにけしけれうを
わきしにけしけれうにけしけれうを
涉るるやうにけしけれうにけしけれうを
にけしけれうにけしけれうにけしけれうを
にけしけれうにけしけれうにけしけれうを

火乱れしやあるにけしけれうにけしけれうを
堂花とけしけれうにけしけれうにけしけれうを
夜更しにけしけれうにけしけれうにけしけれうを
にけしけれうにけしけれうにけしけれうにけしけれうを
とけしけれうにけしけれうにけしけれうにけしけれうを
ろや堂しにけしけれうにけしけれうにけしけれうを
にけしけれうにけしけれうにけしけれうにけしけれうを
えきしにけしけれうにけしけれうにけしけれうにけしけれうを
よきしにけしけれうにけしけれうにけしけれうにけしけれうを

とせり古きより

万點水螢秋草中 秋葉に螢散れいくとゆるハ

万點は螢なることくこのり 六百番歌合

や虫をよて秋澄て 友虫とくくハハハハ

秋れまのちよハハハハハハハハハハハハハハハハ

と後て判云房ハハハハハハハハハハハハハハハハ

いふや虫と友虫と云名ハ付て秋ハハハハハハ

やうよハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

まハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

えり潘安仁ハ秋真賦ハハハハハハハハハハハハハハハ

小照ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

凡秋ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

みさハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

夕殿螢飛思悄 秋燈挑盡 未能眠

夕雲に螢ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

うハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

うハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

うハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

刑鞭 蒲朽 螢空 去 諫鼓 苔深 鳥不驚

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

夏禹王の時慈恵すくして彼じらう蒲穂
乃きれしとつわ人を蒲の穂までやせ人
をにらて罷どかす舜王は民をを奏
とらんとあいにれはとををいそつ
りきすれと並みかくきとほひ百官つ
くくして天下をこつらつとれと報
の蒲は朽てそとつてらひるといふれつと
ハサキのけしききりてるやうなつと
つり系腐成量といつた事いふや并
かある池乃らるを朽よりこいふとさるいふ

黒豆

水草ハ蒲と云

○氷鷄く井な

くあるといふとつにやる人れとて
そにやるいれいふとにけれ
人こそすゑらるゑといふ人
とらる事とやねとてはひく
のいふいハに水鷄乃ていふ
はつらり又いふはたては氏より井な
のサるいふとて夏のわら

ねね
やふけく井乃のいふはけとて水鷄そ

蒲弘

ハミにきく庫の口のきくくすやゆを
難いといふとく庫の口のきくくすやゆを
水難いといふとく庫の口のきくくすやゆを
けしハ漁氏を花散里の難いといふとく
くずかきかきといふとく庫の口のきくくすやゆを
およ月といふとく庫の口のきくくすやゆを
おすくたくお難いといふとく庫の口のきくくすやゆを
おすくたくお難いといふとく庫の口のきくくすやゆを
おすくたくお難いといふとく庫の口のきくくすやゆを

○改火 かり火 改火 改火 改火

改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火
改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火
改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火
改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火
改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火
改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火
改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火
改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火
改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火
改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火 改火

ふくくふく

畔の字を下字集は田家也 家流は

虞芮之民 遜畔とあり 夕の常には田也

のてなしのいなりは 三十字書は

れありて 畔といふて 改とあるは 今三

改のいふ 改を火のいふて 我

下は 今といふ 三十字書は 改とあるは

一は 今といふ 改のいふて 改とあるは

改とあるは 改とあるは 改とあるは

改とあるは 改とあるは 改とあるは

改とあるは 改とあるは 改とあるは

改とあるは 改とあるは 改とあるは

改とあるは 改とあるは 改とあるは

改とあるは 改とあるは 改とあるは

改とあるは 改とあるは 改とあるは

改とあるは 改とあるは 改とあるは

改とあるは 改とあるは 改とあるは

改とあるは 改とあるは 改とあるは

改とあるは 改とあるは 改とあるは

改とあるは 改とあるは 改とあるは

改とあるは 改とあるは 改とあるは

改とあるは 改とあるは 改とあるは

改とあるは 改とあるは 改とあるは

改とあるは 改とあるは 改とあるは

改定乃松のうて夕まはるゝのふきふき

○夏草

ふい草よくさきうてわきまけり一通海しうりも
と野へはいゆき様人しを尻下りあやま
りきこて庭乃清茅は日まてききりもた
るやーふ川のつもすいふまはのうとけ
ハこにいゆりいあゆるあやま花さゆりも
一条禪園に説ふよういゆりゆりもとえんを
まよふゆりもえんといふゆりといひて
はふれあといふ事とある也

にいゆり杜の下まききりいふふもなまはけり
は乃下まききりいふいふなりなりなり
とまりなゆりいとかいふいふいふいふいふ
わう大原とかいふいふいふいふいふいふ
くせり大急坂ハ一説基不しは杜下ま
とまゆり能因三枕よふ城乃名不きり本
いふいふ杜し古今はいふいふいふ杜の下
まききりいふいふいふいふいふいふいふ
わう下まききりいふいふいふいふいふいふ
あや人しあといふいふ

右
れそんはるるて夜草よくて人れははるれ

かまひのいふはるるて夜草よくて

人とおふくかへにゆるとをいふてふり

初子抄は佳物に草れにむとふり

左
夜草はあふりにあふる中解乃弱いづれあふ

夜草はむふりにあふる中解乃弱いづれ

あふる牛ふとま夜草よくてあふる

中解乃弱いづれあふる中解乃弱いづれ

あふる牛ふとま夜草よくてあふる

あふる牛ふとま夜草よくてあふる

と今更りてあふる中解乃弱いづれ

あふる牛ふとま夜草よくてあふる

あふる牛ふとま夜草よくてあふる

あふる牛ふとま夜草よくてあふる

川
機麻乃下草よくてあふる中解乃弱いづれ

あふる牛ふとま夜草よくてあふる

あふる牛ふとま夜草よくてあふる

あふる牛ふとま夜草よくてあふる

蓮
あふる牛ふとま夜草よくてあふる

不深世間法如蓮花在水とこあらわさる
をよきゆきふのときよ帰るあひまうき
さうふきさうきさうふのよてい何ふあ
とましめいさうきさうきさうきさうき
きさうきさうきさうきさうきさうき
さうきさうきさうきさうきさうき
さうきさうきさうきさうきさうき

金
凡そまゝに乃ほふまゝとて涼くあらはる後れ

色れさきいさきまゝまゝとてすくさく
日くく乃と蛸と夕陽まゝとさうきさうき

のときさうきさうきさうきさうき
秋よき涼きさうきさうきさうき
さうきさうきさうきさうきさうき
さうきさうきさうきさうきさうき
さうきさうきさうきさうきさうき
さうきさうきさうきさうきさうき
さうきさうきさうきさうきさうき

花用香散入嵐風 花乃さうきさうき
さうきさうきさうきさうきさうき
さうきさうきさうきさうきさうき
さうきさうきさうきさうきさうき
さうきさうきさうきさうきさうき
さうきさうきさうきさうきさうき
さうきさうきさうきさうきさうき

経る眼目佛る眼知汝花中道善根

法華經は八道花を臥目とせり佛の
眼を八道花乃湯まのつみたよ
れも佛は八眼ふもとまろくも花の中
吾根とうとつる花よてあつとる

○夕ふ

夕ふはやうき河の根よあつてさ
るる夕ふは日るもさるるさる
たりぬほろくといふゆうかたむ
花一とあつて白い庭のこれるふきを
ふて人よとるさるまのてあつとる

ハもまたうれい日るさるさるさる

いふもやういふもは月のかたふらる

れさやういふもは月のかたふらる

の花とる

白^新花なまをけつこは花や花くこ

あつとるさるさるさるさるさるさる

夕ふのむしり源氏のあつとる

源氏夕花美は源氏六条とるは中やう

は花とるさるさるさるさるさるさる

さるさるさるさるさるさるさるさる

桐壺御門乃沙才にてりし御一葉云々
日てくれ流しふいものへく流して源
氏に仿のこあたうれのを流しこれに思ひ
つまつり流しみ糸の市々々々嘆くつた
ほふふのうらに甘く流しより流れて
すあつと流しとこころとこころと帯々巻は
流中なるぬれはむらも一様なる流し母の
くれくわらふらうわらう々々例に六条
つらつら思ひのつたは沙車をふく々々
のこなれうらく笑ふこれと何ともの

むと流し母もふら流しはあつたなんゆふ
ふら流し一葉なり名い人あつてうらふ
やうに流しつた根のつていひ流しと
てふな一葉に流しんを方人よとあつた
日ふも十二三ころうたうら流し流し
ころう美ならずと流しとくすいけは
一て流しとく扇のこれふふな一葉に
あつて流しとくすうら美うてと流し
とくなれふとて扇のつたふ

いふてふら流しとくうら美はくうら々々なるを

志御成ししてさうに後よもふりしれもと
あつてこころのうらさしめいありさあ
ふあつてふりし事を産のうけしるゆれ
こたかりてけいぬーとよき終

あつてさうれもあつてはあつてあつたれむ
とふみはあつてあつてけいぬとくれよと
けいぬと信守の娘のうけしるはあつたれむ
人へ惟光は業門を河であつていぬあつ
れあつていぬはあつてあつたれむ
てきてさうれもあつてはあつたれむ

あつてさうれもあつてはあつたれむ
とふみはあつてあつてけいぬとくれよと
けいぬと信守の娘のうけしるはあつたれむ
人へ惟光は業門を河であつていぬあつ
れあつていぬはあつてあつたれむ
てきてさうれもあつてはあつたれむ

あつてさうれもあつてはあつたれむ
とふみはあつてあつてけいぬとくれよと
けいぬと信守の娘のうけしるはあつたれむ
人へ惟光は業門を河であつていぬあつ
れあつていぬはあつてあつたれむ
てきてさうれもあつてはあつたれむ

あはれい人しるれおとどくやあはれ
寝て一車してさふれ地へつと
ゆるを泣きのめはのれにあらひりや
いふとつと人し

夕陽よぬくぬくをぬくぬくをぬく
えめつと夕陽よぬくぬくをぬく
あはれい人しるれおとどくやあはれ
寝て一車してさふれ地へつと
ゆるを泣きのめはのれにあらひりや
いふとつと人し

あはれい人しるれおとどくやあはれ
寝て一車してさふれ地へつと
ゆるを泣きのめはのれにあらひりや
いふとつと人し

して湯車よあふて多勢ゆくをかりけ
惟たうあふるをすき川に流して東より
ふらふてそとろくわいふるをきき
て四へいともなるまでいまぐわい
歌ふはまはゆりなほほしき
とめと御門もあふるは
大乃寺くして湯いり
せはにやそ湯な
とて

○蟬

うきき 蟬れりな

いし 蟬れりなとあひあはるる

ゆきき 蟬れりなとあひあはるる
あふるはまはゆりなほほしき
とめと御門もあふるは
大乃寺くして湯いり
せはにやそ湯な
とて
あふるはまはゆりなほほしき
とめと御門もあふるは
大乃寺くして湯いり
せはにやそ湯な
とて

八重にうつせふばかりの海を——但蝶乃
想ふし昔ふとふとふとふと秋のふとふと
鳴い日呪ふりタけけけけけけけけけけけ
いつく源氏よかあふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ

新

秋の心くまの社はも蟬は後ろあや下乗海

新

娘のつゝかなけさ乃社も蟬乃国の
あや下乗とくそんともり

日

久附日にもやいなり乃某の産はひくもつる日

忠良

夕日寸菴乃某はふひくもつる乃

日更乃某ともりわろふつるなぞ日更い

ふれ蟬より日くハ秋も蟬と集よも

ふあこと蟬は某ゆめもふあふふあふ

け新あ事くくくくく

五
え蟬乃思ふくにくも思我くじの心せよす人

く川せ某く思ふくなや乃思れわろ我

くく心せよすあふくくく蟬くくく

くくくくくくくくく今忠奉を

くくくくくくくくくく

源氏亮御日の伴ふゆつ川乃あへく

くの良伴ふゆの妻は見え居て思ひく

くくくく女はくくくく風情もくく

くくくくくくくくくく

くくくくくくくくくく

くくくくくくくくくく

くくくくくくくくくく

うきうき

うきうきなにくいあはれふれあはれくあはれく袖か
あはれくあはれくあはれくあはれくあはれくあはれく
あはれくあはれくあはれくあはれくあはれくあはれく
あはれくあはれくあはれくあはれくあはれくあはれく

あはれくあはれくあはれくあはれくあはれくあはれく
あはれくあはれくあはれくあはれくあはれくあはれく
あはれくあはれくあはれくあはれくあはれくあはれく
あはれくあはれくあはれくあはれくあはれくあはれく

あはれくあはれくあはれくあはれくあはれくあはれく
あはれくあはれくあはれくあはれくあはれくあはれく
あはれくあはれくあはれくあはれくあはれくあはれく
あはれくあはれくあはれくあはれくあはれくあはれく

あはれくあはれくあはれくあはれくあはれくあはれく

あはれくあはれくあはれくあはれくあはれくあはれく

あはれくあはれくあはれくあはれくあはれくあはれく

あはれくあはれくあはれくあはれくあはれくあはれく

あはれくあはれくあはれくあはれくあはれくあはれく

あはれくあはれくあはれくあはれくあはれくあはれく

あはれくあはれくあはれくあはれくあはれくあはれく

あはれくあはれくあはれくあはれくあはれくあはれく

雅

あはれくあはれくあはれくあはれくあはれくあはれく

あはれくあはれくあはれくあはれくあはれくあはれく

くあふふれく思ひくはわろ袖の
とつとをくになくあふれくうすこ
は秋風くといふてふ秋のうにあり
下葉一葉つらふ下葉に秋の思ひは
蝶の鳴はふと思ふ下葉乃一葉はち
花をふれ秋にけり思ふはち
日曜ハ集ふも蝶もあふ又ふふあふ
ありて蝶も秋にふじふじとて
ふらふとふふ序に若く春當に
晴花中 秋蟬くは樹上滝曲折名

發并謡とあり詠詠中 蟬啼一黃葉
流文蝶もあふ

日くはつるなる日言ぬ思ふは秋陰をまは
烟乃鳴はるに秋乃日曜くくこにふ
はふ乃陰をてあふ思ふ密勅く一
あふ云あふ乃陰夕陽は花のふ事當時
秋陰をゆるふ事思ふ家の中思ふふれ
そふれはるにあり日曜はるに思ふ思ふ
ふふふふ

日くはつるに思ふ思ふ人をはふふ

烟のよきふくはねもみよ人ぞうよとてし

日^四見乃^ハ奈^ハい^ハと^ハね^ハに^ハあ^ハい^ハ秋^ハ夕^ハ言^ハう^ハな^ハれ^ハと^ハ成^ハき^ハう

日^ハく^ハく^ハ乃^ハと^ハふ^ハい^ハと^ハ海^ハの^ハき^ハこ^ハの^ハを^ハ秋^ハ乃^ハ

夕^ハ言^ハう^ハの^ハれ^ハと^ハの^ハり

日^ハく^ハく^ハ乃^ハの^ハ夕^ハ言^ハハ^ハ凡^ハの^ハ中^ハ外^ハは^ハう^ハ人^ハと^ハれ^ハ一

ひ^ハ里^ハ乃^ハ秋^ハの^ハゆ^ハ色^ハハ^ハゆ^ハと^ハく^ハゆ^ハれ^ハく^ハと

い^ハく^ハは^ハ凡^ハの^ハき^ハく^ハて^ハ力^ハに^ハじ^ハく^ハと

外^ハは^ハう^ハ人^ハと^ハれ^ハこ^ハの^ハ中^ハ外^ハは^ハう^ハ人^ハと^ハれ^ハ一

秋^ハ乃^ハは^ハい^ハく^ハく^ハ乃^ハの^ハ中^ハ外^ハは^ハう^ハ人^ハと^ハれ^ハ一

お^ハと^ハの^ハり

○扇

わ^ハく^ハは^ハ凡^ハの^ハき^ハく^ハ乃^ハの^ハ中^ハ外^ハは^ハう^ハ人^ハと^ハれ^ハ一

ゆ^ハり^ハ秋^ハ乃^ハの^ハゆ^ハ色^ハハ^ハゆ^ハと^ハく^ハゆ^ハれ^ハく^ハと

を^ハい^ハく^ハは^ハ凡^ハの^ハき^ハく^ハ乃^ハの^ハ中^ハ外^ハは^ハう^ハ人^ハと^ハれ^ハ一

扇^ハハ^ハ月^ハ乃^ハは^ハい^ハく^ハく^ハ乃^ハの^ハ中^ハ外^ハは^ハう^ハ人^ハと^ハれ^ハ一

の^ハ言^ハう^ハ乃^ハは^ハい^ハく^ハく^ハ乃^ハの^ハ中^ハ外^ハは^ハう^ハ人^ハと^ハれ^ハ一

つ^ハき^ハは^ハ乃^ハは^ハい^ハく^ハく^ハ乃^ハの^ハ中^ハ外^ハは^ハう^ハ人^ハと^ハれ^ハ一

い^ハく^ハは^ハ乃^ハは^ハい^ハく^ハく^ハ乃^ハの^ハ中^ハ外^ハは^ハう^ハ人^ハと^ハれ^ハ一

乃^ハは^ハ乃^ハは^ハい^ハく^ハく^ハ乃^ハの^ハ中^ハ外^ハは^ハう^ハ人^ハと^ハれ^ハ一

い^ハく^ハは^ハ乃^ハは^ハい^ハく^ハく^ハ乃^ハの^ハ中^ハ外^ハは^ハう^ハ人^ハと^ハれ^ハ一

乃政よりと注のり句ふとゆくを儀
のり裏のくも送られあふくあり
南殿よりこのを注ふ新下乃句と云
内侍殿をよて上達部は注いしを注
ふて注るは注のりや注の殿
四月一日ふ下下に殿と注殿を注
て乃のいふくや 幸中行事并会より
友乃る殿と秋乃白扇とつれ先よにんとす 忠岑
友乃言くま わ 友乃殿と秋乃白扇
といふれまはんとするそとく扇とす

あふはいすきくゆり又秋乃白扇も
そくゆめといふ建くそくそくへん
織女乃扇の凡は旁曉てをすむる え 鶺鴒 え
たふく乃扇の凡は天河乃旁曉てを
そくゆめ 鶺鴒 のくといふそくハ鶺鴒乃羽
をくく橋といふて織女はゆを橋
よハゆハ鶺鴒乃ついでる橋よりそく 鶺鴒 の
あふくをそくをそくをくけくといふ 鶺鴒
乃橋といふくそくハゆをそくハ 鶺鴒
くく橋よにゆくと天河と世俗よりを

庭をつらふ事ハ天智天皇此作か注す事
 ろうりつ乃御宸直由乃火をまけは
 苑人をとてるりととく^ひく沙汰して
 凡自他よほろろくあなれ凡を神ニ
 るれくもし云ハ庭の事ハ蝙蝠ト云ハ庭と
 付る蝙蝠乃羽を見て庭をはくれり
 源氏若菜巻よもろりともそと庭のこハ
 凡わろくと庭庭乃凡わろともいり
 夕顔巻よもろき庭乃これろとも庭よ
 匂いのこれろりたさめろろともいり

感夏不消電終年無盡風
固愛此風とて

りこゝはふしうに殊れあらふいふ事浪た
 といふはふしうといふ事あらふいふ事
 夜消さるる雲といふ年乃をうりてふいふ
 といふ凡の盡さぬといふ事

引秋生衣裏花月入懷中
願乃花月入懷中
中

唯願秋風未到前
夜半夢中逢幸と
願ふと

斑姫裁扇意誇尚 斑嬖婦ハ王様娘なるを漢武

帝之ニ夫人ノ中ノ才一有りテ侍士婦

季夫人もいふゆゑに養人かゝてあり

乃ちもこれとやもかゝにあらひしよしと

こゝろ縁眉ふもあつ月をふて月

よハ清冷不返し泣のるれも竹と云

にまゝとて白絹と張て力をあふも猶

にもしとゆゑてふももとま雪と

云ふも来て姫も乃とてゆゑも仕女

しも泣きも其他もつゝ因縁にあら

う海もり意誇尚ふもつゝのり

斑女園中秋扇色也王基上夜姫に交 是を

詠詠よ言詩し扇乃又いひはてしをるた

ふて云筆よ言れつゝ人あもも言れのを

ふても源氏もさうハ扇といふものをあつ

園乃いふもをさう詠もハよれ河よ白扇を

ふ海もつゝにあらつゝ人あもも言れのを

扇ハねよすてふれも事を侍従に

もしもふてて焚きまれば琴のふもめ

つゝとあり

大井彦皇子は園鶏より将より河皇子は
上より跡とよりにわたりこそがら如雇つ
ういとつりてより氷に其内奏後
一内より茅萩とのりく果をよよ
わとそり

もつた乃とを急し消さひまふしひじろ乃
かおひし

少室仁徳を皇より嫁め治てにた
急やひよりしひじろれかめしひし

王臺皇

源氏蜻蛉卷ふしかれは少室に日しは
卯月より六月まで内裏よりいり

○納涼 物ととも夕すて

夏より乃は陰は乃らるを急けく日影と
里よりふはひれつてむじのなりし日
もそろひ夕月夜やうるるゆにむま
るくすは麻も赤にれつて使す
凡乃むしと秋よふのをよむ

前古 秋よりと陰よ急いつはげゆを秋乃 初後意 秋より片やうるをのす一はり急いつは

少川乃人の秋下陰いつても凡情より
古今雅部は石よりかきとるか桐をれ
のいすくれくはといふ秋のちかき小世ハ
枯れとつるといふ中れろかきとるはれに
へるけうとれといふ可乃ちかきとのちか陰ハ
細涼のたれと枯れといふいふ

○泉いつと海より岩清水の井岩井乃水 光
も清ろ 玉の井 玉城又迎は日名
玉井乃ちかきとれ秋いつとる座すむい
うといふよてのちかきといふ事とない人

いふといふはいふといふは
きとるくちかきといふとる老れを
といふいふはいふといふは
すといふといふといふといふ

松陰乃岩井乃ちかきとれ秋いつとる座すむい
松けの岩井乃ちかきとれ秋いつとる座すむい
いといふはいふといふといふといふ
のり

八重藤あけつ下に流るる水なまといふ
いふ藤乃ちかきとれ下といふはいふは
いふ藤乃ちかきとれ下といふはいふは

なまゝのうれとてし大東や勝乃達うせふ
まぬえ又しつゝいんがうらつ快ふたしふ
めり能宣りしといふれり女うりやうりま
あやのいづう女おのりまうり能宣い系
へようけらお坂しふ名とてめめ快とほふ
しつゝふむ并いふて腕乃達うとらう
つててめしつゝふふいんがうらうすな
しふこれのうとてめめいんが能宣并と
なまゝしう

トもろろふ秋もかゝん法いづれをふとて中書

宏祿乃下つらふは秋はふい法あふ
まゝしう

なまゝの月満道のますまひなまゝの達ういふ法基後

なまゝの月満道乃まゝまひなまゝの達うを志
けくじまひいづし対氷満月歌すし
しつゝいづれとすし風神し

法新法なまゝの月満道のまゝまひなまゝの達う画同

じふふは親乃うらふとの井れあてし月の
しつゝいづしうもいふ今は黄くニうり
法新法なまゝの月満道のまゝまひなまゝの達う

われわれといふうをいふくわくても
月のうつとこれうを納涼よまきり
を晴ていふてこれ月をすいふを
えい並眼王と松涼と珠高沙月う自得に匡
衡といふし眼王の珠はつと時よむくと
すくくくこれ珠をてする月
ふり涼と珠とふふ事し眼王松涼の
珠とま砂乃月のうとくをこれと
あつとくくくしと侍のめし
け秋ハ納涼の下は虫ありとく

池冷水三伏夏松風一夢游 英明

池のふれと海とくをこれと伏のふれと
をふり松乃風とくけいすくく秋の
これわく

水檻風不待秋ありとこれやふいふ風とくか
まき秋とくぬとく納涼と泉乃風はか
これ歌とくくくく泉とくくこれ納
涼とくく

夕立

ゆふらとくいふくくくくくくく

神のうへにひらいておさうー一足 野を
系あううと一歩中を川に流るる
ひんもふりーやういま出るふー一
いしからよは夕暮れをかめらうと
そふれあうのういふういふはかる若
乃縁もふは色ういなるまけよん湯
ちきくあうてふ沙すー一足うー
もよせ

夕暮れ^新のうへにひらいておさうー一足 野を
系あううと一歩中を川に流るる
ひんもふりーやういま出るふー一
いしからよは夕暮れをかめらうと
そふれあうのういふういふはかる若
乃縁もふは色ういなるまけよん湯
ちきくあうてふ沙すー一足うー
もよせ

夕暮れ^新のうへにひらいておさうー一足 野を
系あううと一歩中を川に流るる
ひんもふりーやういま出るふー一
いしからよは夕暮れをかめらうと
そふれあうのういふういふはかる若
乃縁もふは色ういなるまけよん湯
ちきくあうてふ沙すー一足うー
もよせ

夕暮れ^新のうへにひらいておさうー一足 野を
系あううと一歩中を川に流るる
ひんもふりーやういま出るふー一
いしからよは夕暮れをかめらうと
そふれあうのういふういふはかる若
乃縁もふは色ういなるまけよん湯
ちきくあうてふ沙すー一足うー
もよせ

夕暮れ^新のうへにひらいておさうー一足 野を
系あううと一歩中を川に流るる
ひんもふりーやういま出るふー一
いしからよは夕暮れをかめらうと
そふれあうのういふういふはかる若
乃縁もふは色ういなるまけよん湯
ちきくあうてふ沙すー一足うー
もよせ

夕暮れ^新のうへにひらいておさうー一足 野を
系あううと一歩中を川に流るる
ひんもふりーやういま出るふー一
いしからよは夕暮れをかめらうと
そふれあうのういふういふはかる若
乃縁もふは色ういなるまけよん湯
ちきくあうてふ沙すー一足うー
もよせ

夕暮れ^新のうへにひらいておさうー一足 野を
系あううと一歩中を川に流るる
ひんもふりーやういま出るふー一
いしからよは夕暮れをかめらうと
そふれあうのういふういふはかる若
乃縁もふは色ういなるまけよん湯
ちきくあうてふ沙すー一足うー
もよせ

夕暮れ^新のうへにひらいておさうー一足 野を
系あううと一歩中を川に流るる
ひんもふりーやういま出るふー一
いしからよは夕暮れをかめらうと
そふれあうのういふういふはかる若
乃縁もふは色ういなるまけよん湯
ちきくあうてふ沙すー一足うー
もよせ

ナ市六夕立とらんわましくふのこり

くろし

川上に夕立を起し、
うはきやうのれをまきこ
好忠

河上又夕立をうへにきく梁塵乃小波
立さくともさみ小波し

六乃里ハ夕之村ヲ儀并原局乃モカメ菜ルナハ

けふ夕立のくさし居る所
もろともけふと眼あのを
そとより

夕立乃晴り炭のよるより重利は凍る所なり
中立乃くく炭のよるより重利は凍る所なり

高の玉さみすゝにとうり

荒アラ和ワ穰ハレ施米
なごしめし

世るは友なりて人とのみれはうてく
 一と神の心くはをこし神とは是は
 るこんふあふわいと大ぬきよ一漢茅を人
 うまほく世なり佐藤をほく世すうぬき
 てるをふすをなこしうてくし名つを
 ふる川乃なりてまふ事のはは風七
 秋らくうてまふしをといふは月
 のうてくし麻乃ふふ事とて漢茅

人々も方々より集りてあそびし人
もあそびしは命のむかしき事なり
ぬいとしむへハに六月後ハ秋をば
らひのこゆる後よりゆへりといふ
河邊よりたぐ麻乃葉のしりて次
はより夕又よりすきふりといふ
といふ大掌會沙後也茅と稱ハ
後川にて後茅と稱し人々を指
てこゆる

みづす川流まよやゆめをゆめは秋風を吹

くくく河流まよやゆめをゆめは秋
風の吹まよやゆめをゆめは秋
風の吹まよやゆめをゆめは秋

まよやゆめをゆめは秋風の吹まよやゆめをゆめは秋風の吹

まよやゆめをゆめは秋風の吹まよやゆめをゆめは秋風の吹
まよやゆめをゆめは秋風の吹まよやゆめをゆめは秋風の吹

秋風を吹まよやゆめをゆめは秋風の吹まよやゆめをゆめは秋風の吹

秋風を吹まよやゆめをゆめは秋風の吹まよやゆめをゆめは秋風の吹
秋風を吹まよやゆめをゆめは秋風の吹まよやゆめをゆめは秋風の吹

秋風を吹まよやゆめをゆめは秋風の吹まよやゆめをゆめは秋風の吹

